

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野  
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

年報（第11号）

平成25年4月～平成27年3月



## ご挨拶

家族看護学教室年報の第 11 号をお届けいたします。日ごろから教室を応援してくださっている健康科学・看護学専攻内外の皆さまに心よりお礼申し上げます。教室は開設 20 周年をまわり人事も整いましたので、新たなるスタートと発展を祈念して、今号は真っ白な表紙にいたしました。

前回の年報で、2011 年 4 月からの 2 年間は、私が健康総合科学科の教育委員長として激動の 2 年間であったとご報告しましたが、2013 年 4 月からの 2 年間もまた、激動の 2 年間でした。教授として迎えた新年度、教室の充実をはかりたいと考えていた矢先、健康科学・看護学専攻の専攻長を拝命したのです。なってみるまでわからないとはこのことだと思いますが、専攻長としての仕事は非常に多岐にわたっていました。専攻全体の充実と発展を考える立場になったと言えば聞こえはよいですが、実際は先ず目の前にある大学院入試や修論発表会、学位審査を間違いなく平等に滞りなく行うことに腐心しました。医学系研究科長の宮園浩平教授、前専攻長の真田弘美教授はじめ多くの先生方や、池田真理助教・佐藤伊織助教・教室事務の浅野万里子さん・山本千季さんをはじめとする教室員にはたいへんお世話になり、感謝しています。2013 年 8 月に行われた大学院入試において、助産師教育コース・保健師教育コースの募集を開始したことも影響して、院試の倍率が高くなり、優秀な院生さんが入学してくださったことは専攻長として嬉しかったことの一つです。また 2015 年 3 月には健康科学・看護学専攻としてはじめて学位記を授与する式典を医学部図書館 333 号室にて執り行い、7 名の博士と 18 名の修士課程修了者を送り出すことができました。この専攻学位記伝達式の創始は、ご家族も含め分野を超えた皆様から感謝の言葉をいただき、私としても専攻長冥利に尽きることでした。

学位記伝達式の挨拶でもあえてふれさせていただきましたが、この間に起こってしまった‘STAP 細胞’事件は、サイエンスの世界にも潜む闇をあぶり出し、我々に警告を与えてくれました。東京大学医学部では 2013 年度より剽窃ソフトを導入していましたが、2014 年度からは大学全体で導入されるようになり、学位論文は指導教員の責任で 3 回のチェックを経て提出します。形式のみでなく一層の倫理性をもちながら、独創性の高い研究を実施し成果発表していかなくてはなりません。

この 2 年間に当教室に所属して学位を授与された者は、学士 1 名（吉備智史君）、修士 10 名（岡部花枝君、菊池良太君、目麻里子君、水越真依君、李孝媛君、江本駿君、高梨志帆君、藤田彩子君、松原由季君、丸山暁子君）、博士 4 名（藤岡寛君、桐谷麻美君、大塚寛子君、森下美紀君）です。おめでとうございます。ちょうどこの 2 年度にわたり在籍してくださった福澤利江子先生は、海外での学位取得経験を活かして専攻教員へも英語での presentation に関する FD-class で尽力してくださいました。池田真理先生は 2014 年 4 月より看護管理学分野に異動となりましたが、複数の共同研究が継続しています。2014 年 7 月には網谷・マリー・レイチェル先生が着任され、グローバル化に拍車がかかりました。2012 年 4 月に分野内に設立した QOL 研究センターが実施している共同研究は増え、2015 年 3 月には 130 名の参加を得て公開セミナーを開催し、QOL 研究啓発の機能も活性化しています。ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）や活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム（GLAFS）といったリーディング大学院に学ぶ者もあります。多くの院生が修士論文を英語で執筆するようになり、2014 年度に教室員が行った国際学会や国際シンポジウムでの発表は 16 件に及びました。私も再任を認められましたので、今後もグローバル・リーダーとなる若手研究者を輩出するべく貢献したいと願っています。当教室へのますますのご理解と、ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

2015 年 3 月

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野

教授 上列府 圭子

# 目次

ご挨拶

1. 研究活動	
1-1. 学術研究業績	5
1-2. 研究活動費	26
1-3. 学内外の公的活動	29
2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）	31
3. 教室カンファレンス	33
4. 家族看護学教室研究会	
4-1. 家族看護学研究会	53
4-2. 家族ケア症例研究会	55
5. 院生自主勉強会	57
6. 教育活動（担当講義・実習）	63
7. 教室の沿革	65
資料（卒業論文・修士論文・博士論文）	67
家族看護学教室 教室員（平成25年度～平成26年度）	

## 1. 研究活動

### 1-1. 学術研究業績

#### 論文（原著論文・総説）

Kamibeppu K, Murayama S, Ozono S, Sakamoto N, Iwai T, Asami K, Maeda N, Inada H, Kakee N, Okamura J, Horibe K, Ishida Y. Predictors of posttraumatic stress symptoms among adolescent and young adult survivors of childhood cancer: importance of monitoring survivors' experiences of family functioning. *Journal of Family Nursing*. 2015; (in press).

Kamibeppu K, Sato I, Hoshi Y. The experience of Japanese adolescents and young adults after losing siblings to childhood cancer: three types of narrative. *Journal of Pediatric Oncology Nursing*. 2015; 32(3): 165-177.

Ozono S, Ishida Y, Honda M, Okamura J, Asami K, Maeda N, Sakamoto N, Inada H, Iwai T, Kamibeppu K, Kakee N, Horibe K. General health status and late effects among adolescent and young adult survivors of childhood cancer in Japan. *Japanese Journal of Clinical Oncology*. 2014; 44(10): 932-940.

Taguchi R, Sakamoto N, Sato I, Kamibeppu K. A study of posttraumatic stress symptoms among young adults in Japan: correlates and effects on mental health and quality of life. *Journal of Health and Human Ecology*. 2014; 80(6): 245-259.

Ikeda M, Hayashi M, Kamibeppu K. The relationship between attachment style and postpartum depression. *Attachment & Human Development*. 2014; 16(6): 557-572.

Ikeda M, Nishigaki K, Kida M, Setoyama A, Kobayashi K, Kamibeppu K. The development and implementation of the maternal mental health promotion program for expectant mothers. *Open Journal of Nursing*. 2014; 13(4): 971-979.

Ikeda M, Kamibeppu K. Measuring the risk factors for postpartum depression: development of the Japanese version of the Postpartum Depression Predictors Inventory-Revised (PDPI-R-J). *BMC Pregnancy and Childbirth*. 2013; 13: 112.

Kaneko M\*, Sato I\*, Soejima T, Kamibeppu K. Health-related quality of life in young adults in education, employment, or training: development of the Japanese version of Pediatric Quality of Life Inventory (PedsQL) Generic Core Scales Young Adult Version. *Quality of Life Research*. 2014; 23(7): 2121-2131. (\* The first two authors contributed equally to this work.)

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Mukasa A, Ida K, Sawamura Y, Sugiyama K, Saito N, Kumabe T, Terasaki M, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Cancer-specific health-related quality of life in children with brain tumors. *Quality of Life Research*. 2014; 23(4): 1059-1068.

Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Murayama S, Kumabe T, Sugiyama K, Mukasa A, Saito N, Sawamura Y, Terasaki M, Shibui S, Takahashi J, Nishikawa R, Ishida Y, Kamibeppu K. Impact of late effects on health-related quality of life in survivors from pediatric brain tumors: motility disturbance of limb(s), seizure, ocular/visual impairment, endocrine abnormality, and higher brain dysfunction. *Cancer Nursing<sup>TM</sup>: An International Journal for Cancer Care*. 2014; 37(6): E1-E14.

Fukuzawa RK\*, Kodate N\*. Maternity services in Japan: a comparative perspective. *University of Tokyo Journal of Law and Politics*. 2014; 11: 129-158. (\* The first two authors contributed equally to this work.)

Suetsugu Y, Honjo S, Ikeda M, Kamibeppu K. The Japanese version of the Postpartum Bonding Questionnaire: examination of the reliability, validity, and scale structure. *Journal of Psychosomatic Research*. 2015; 79: 55-61.

Ohtsuka-Ono H, Sato I, Ikeda M, Kamibeppu K. Premenstrual distress among Japanese high school students: self-care strategies and associated physical and psychosocial factors. *Women & Health*. 2015; (in press).

Morishita M, Kamibeppu K. Quality of life and satisfaction with care among family caregivers of patients with recurrent or metastasized digestive cancer requiring palliative care. *Supportive Care in Cancer*. 2014; 22(10): 2687-2696.

Kikuchi R, Kamibeppu K. Parents' quality of life and family functioning in pediatric organ transplantation. *Journal of Pediatric Nursing*. 2015; 30(3): 463-477.

Kikuchi R, Ono M, Kinugawa K, Endo M, Mizuta K, Urahashi T, Ihara Y, Yoshida S, Ito S, Kamibeppu K. Health-related quality of life in parents of pediatric solid organ transplant recipients in Japan. *Pediatric Transplantation*. 2015; 19(3): 332-341.

Toyama N, Kurihara K, Muranaka M, Kamibeppu K. Factors influencing self-efficacy in breastfeeding support among public health nurses in Japan. *Health*. 2013; 12(5): 2051-2058.

Komachi M, Kamibeppu K. Acute stress symptoms in families of patients admitted to the intensive care unit during the first 24 hours following admission in Japan. *Open Journal of Nursing*. 2015; 5(4): 325-335.

Sugishita K, Kurihara K, Murayama S, Kamibeppu K. Approach to perinatal mental health and child abuse prevention in Japanese prefectural health centers. *Health*. 2013; 5(4): 735-742.

池田真理, 西垣佳織, 上別府圭子. 妊婦の「妊娠体験」とそれを夫と共有することについてアタッチメントの視点からの考察. *心理臨床研究*, 2013; 31(2): 312-317.

三井千佳, 山崎あけみ, 前田尚子, 堀部敬三, 浅見恵子, 原純一, 井田孔明, 康勝好, 小澤美和, 真部淳, 上別府圭子. 思春期がん経験者の QOL と病気に関する自己開示. *日本小児血液・がん学会雑誌*, 2013; 50(1): 79-84.

副島堯史, 村山志保, 東樹京子, 佐藤伊織, 平賀健太郎, 武田鉄郎, 上別府圭子. 小中学校の教員における小児がんへの認識および小児がん経験者への支援. *小児保健研究*, 2014; 73(5): 697-705.

菊池良太, 小野稔, 絹川弘一郎, 遠藤美代子, 水田耕一, 浦橋泰然, 井原欣幸, 吉田幸世, 伊藤秀一, 上別府圭子. 小児臓器移植患者の保護者の養育負担感の検討. *移植*, 2015; (in press).

松原由季, 村山志保, 並木由美江, 上別府圭子. 保育所感染症対策における看護職の専門性と看護職が認識する課題. *小児保健研究*, 2014; 73(6): 826-835.

吉備智史, 池田真理, 上別府圭子. 日本における小児に対する「いのちの教育」に関する研究－医療関係者による実践に着目して－. *日本小児看護学会誌*, 2014; 23(3): 70-76.

安藤朗子, 栗原佳代子, 川井尚, 平岡雪雄, 佐藤紀子, 石井のぞみ, 山口規容子. 極低出生体重児の発達研究 (9) - 就学前 (6 歳) から中学期 (14 歳) までの知的発達の推移 -. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 2013; 49: 193-199.

安藤朗子, 栗原佳代子, 川井尚, 平岡雪雄, 佐藤紀子, 石井のぞみ, 山口規容子. 極低出生体重児の発達研究 (10) - 9 歳児の知的発達と背景要因との関連についての探索的検討 -. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 2014; 50: 247-252.

西垣佳織, 黒木春郎, 江川文誠, 藤岡寛, 上別府圭子. 在宅重症心身障害児主介護者のレスパイトケア利用希望に関連する要因. 小児保健研究, 2014; 73(3): 475-483.

杉下佳文, 上別府圭子. 妊娠うつと産後うつの関連 - エジンバラ産後うつ病自己評価表を用いた検討 -. 母性衛生, 2013; 53(4): 444-450.

平賀健太郎, 野中らいら, 副島堯史, 東樹京子, 佐藤伊織, 武田鉄郎, 上別府圭子. 小児がん患者に対する特別支援教育コーディネーターの役割意識の構造とその影響要因. 育療. 2014; (in press).

#### 論文 (依頼原稿など)

上別府圭子. 産後うつ病 / うつ病を患った女性と子育て. 女性心身医学, 2013; 18(3): 391-397.

上別府圭子. 家族臨床: 私の見立て 家族看護における「見立てること」の啓発. 家族療法研究, 2013; 30(3): 278-281.

上別府圭子, 瀬戸山有美, 水越真依, 池田真理. 虐待予防に向けた周産期からの育児支援システムと助産師のかかわり. BIRTH, 2013; 2(2): 64-72.

上別府圭子, 石橋朝紀子. 小児がん経験者と家族のレジリエンスとケア. 小児看護, 2013; 36(8): 1007-1012.

上別府圭子. 復興を支える理論 - レジリエンスとその周辺 -. 第 19 回日本家族看護学会学術集会会長講演. 家族看護学研究, 2013; 18(2): 119-126.



池田真理, 上別府圭子. 看護教育におけるケースカンファレンス (特集 ケースカンファレンスの理論と実際 第 4 部 臨床の教育現場におけるケースカンファレンス). 精神療法, 2013; 39(5): 726-730.

池田真理, 水越真依, 上別府圭子. 妊娠中からの子育て支援—児童虐待予防の視点から—. 周産期医学, 2014; 44(7): 953-956.

佐藤伊織, 上別府圭子. 悪性脳腫瘍治療と QOL 評価法. Clinical Neuroscience, 2013; 31(10): 1154-1155.

菊池良太, 目麻里子, 水越真依, 佐藤伊織, 福澤利江子, 池田真理, 上別府圭子. 家族看護の介入研究における「家族」の捉え方と介入効果の評価. 家族療法研究, 2014; 31(2): 165-175.

東樹京子, 上別府圭子. 看護師が築く、子どもと家族との信頼関係 (特集 子どもの白血病—最新の知識と基本的ケア—白血病の子どもと家族の支援— 各論: 入院後の具体的なケアと支援). 小児看護, 2013; 36(8): 1013-1019.

東樹京子, 上別府圭子. 信頼関係を築く 小児看護ケアガイドライン 2012—小児がんの子どもの QOL の向上を目指した看護ケアのために— 第 1 章. 内田雅代著書代表, 平成 21-24 年度科学研究費補助金基盤研究 (B): 小児がんの子どもと家族を中心とした多職種協働チームの看護師支援プログラムの開発, 2012; 11-13.

東樹京子. 小児がんの支持療法とケア. 保健の科学, 2015; 57(2): 123-126.

#### 学会二次抄録など

上別府圭子. 産後うつ病／うつ病を患った女性と子育て. 第 42 回日本女性心身医学会学術集会 ワークショップ 2: 女性のうつ病と子育て, 第 42 回日本女性心身医学会学術集会 プログラム・抄録集, 2013; 66.

上別府圭子. 小児脳腫瘍経験者の自尊感情に、心的外傷後成長が及ぼす影響. 第 13 回日本トラウマティック・ストレス学会 こころのケアの未来—荒廃から新生への道標として—, 2014; 51-53.

上別府圭子, 内田雅代, 小原美江, 佐藤伊織. 小児がん看護 学術交流セミナー「実践報告を投稿して実践の知をひろめよう!」. 日本小児がん看護学会学術検討委員会, 第 12 回日本小児がん看護学会学術集会 プログラム・総会号, 2014; 399.

池田真理, 上別府圭子. 産後に発生する要因が産後うつ病発症に及ぼす影響に関する研究. 第 33 回日本看護科学学会学術集会 講演集 一般示説「家族看護」, 2013; 363.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 武笠晃丈, 井田孔明, 澤村豊, 杉山一彦, 斉藤延人, 隈部俊宏, 寺崎瑞彦, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. 脳腫瘍をもつ子どもに対する病気についての説明の程度. 第 32 回日本脳腫瘍学会学術集会 プログラム・抄録集, 2014; 62.

田中將太, 佐藤伊織, 武笠晃丈, 成田善孝, 上別府圭子, 斉藤延人. 脳腫瘍患者を対象とした MDASI-BT 日本語版の信頼性・妥当性の評価研究. 第 32 回脳腫瘍学会学術集会 プログラム・抄録集, 2014; 62.

副島堯史, 佐藤伊織, 上別府圭子. 思春期の小児がん経験者における復学支援 一同級生・担任からの Perceived Social Support に焦点を当てて. 第 55 回日本小児血液・がん学会学術集会 プログラム・総会号, 2013; 375.

瀬戸山有美, 池田真理, 鈴木涼子, 小林千恵, 上別府圭子. 入院中の小児がん患児における睡眠の客観的評価とその関連要因の探索. 第 55 回日本小児血液・がん学会学術集会 プログラム・総会号, 2013; 380.

菊池良太, 小野稔, 絹川弘一郎, 水田耕一, 伊藤秀一, 上別府圭子. 日本における小児臓器移植患者の保護者の健康関連 QOL. 第 50 回日本移植学会総会 プログラム・抄録集, 2014; 314.

水越真依, 池田真理, 上別府圭子. パニック障害を有する妻を支える夫の初めての育児体験. 第 6 回日本不安障害学会学術大会 抄録集, 2014; 170.

著書・編著・教科書など

Fukuzawa RK, Kodate N. Chapter 8: Japan. In: Kennedy P, Kodate N (Eds). Maternity Services and Policy in an International Context: Risk, Citizenship and Welfare Regimes. Oxon, UK: Routledge, 2015; 153-178.

上別府圭子. 幼児の発達と遊び, 幼児の遊びを支える. 汐見稔幸 (監修). 中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書 新技術・家庭 家庭分野. 教育図書, 2015; 44-51.

上別府圭子. 特集 2 産科・婦人科領域でうつ病等気分障害を抱えた患者さんへの看護師等医療スタッフの役割: 産後うつ病の予防とケア、育児支援に向けて. 精神科医療求職ガイド 2013 年度版, 2013; 31-38.

上島国利, 上別府圭子, 平島奈津子 (編著). 知っておきたい精神医学の基礎知識ーサイコロジストとメディカルスタッフのために[第2版]. 誠信書房, 2013.

上別府圭子 (編集). 特集 子どもの緩和ケア. 保健の科学, 杏林書院, 2013; 55(6).

上別府圭子 (編集). 特集 エビデンスのある心理療法(1)ー手ごたえと限界と展開ー. 保健の科学, 杏林書院, 2014; 56(2).

上別府圭子 (編集). 特集 エビデンスのある心理療法(2)ー子どもと家族のためのプログラムー. 保健の科学, 杏林書院, 2014; 56(10).

池田真理, 上別府圭子. 親は子どものころにどのように対応していけばよいのか. 子どものころの医学. 中村和彦編著, 金芳堂, 2014; 12-23.

佐藤伊織, 上別府圭子 (訳). 第 5 章 認知的枠組み (スキーマ) の変化という視点から見た心的外傷後成長. 心的外傷後成長ハンドブックー耐えがたい体験が人の心にもたらすもの (原題: Handbook of Posttraumatic Growth-Research and Practice). 宅香菜子, 清水研 監訳, 医学書院, 2013; 119-147.

小林京子, 上別府圭子 (訳). 第 6 章 大きな喪失によって引き起こされるさまざまな結果や心的外傷後成長ー特に家族関係の文脈において. 心的外傷後成長ハンドブックー耐え難い体験が人の心にもたらすもの (原題: Handbook of Posttraumatic Growth-Research and Practice). 宅香菜子, 清水研 監訳, 医学書院, 2014; 148-180.

岸利江子. 米国の医療制度と周産期の医療提供システムの概要. 助産師基礎教育テキスト 第3巻『周産期における医療の質と安全』. 日本看護協会出版会, 2014; 69-83.

栗原佳代子, 上別府圭子. 精神看護学 I 精神障害の一次・二次・三次予防. 精神保健学第6版, ヌーヴェルヒロカワ, 2015; 9-13.

## 研究班会議・報告書など

上別府圭子, 池田真理, 杉下佳文, 栗原佳代子, 西垣佳織. 産後うつ病の重症化を予防するために妊娠期に提供するプログラム (Maternal Mental Health Promotion Program: MMHPP) の効果、子どもと家族の双方に向けた心の問題の総合的な診断・治療システムの開発. 平成 24 年度 文部科学省運営費交付金プロジェクト事業 大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実 研究実績報告書, 2013; 235-236. (研究代表者: 吉田敬子, 神庭重信) .

池田真理, 西垣佳織, 上別府圭子. 産後うつ病の重症化を予防することを目的としたプログラムの開発と実施可能性の評価、子どもと家族の双方に向けた心の問題の総合的な診断・治療システムの開発. 平成 24 年度 文部科学省運営費交付金プロジェクト事業 大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実 研究実績報告書, 2013; 237-239. (研究代表者: 吉田敬子, 神庭重信) .

上別府圭子, 池田真理. 包括的な育児支援プログラムをふまえた今後の新たな助産師の役割. Maternal Mental Health Promotion Program (MMHPP)をふまえて. 子どもと家族の双方に向けた心の問題の総合的な診断・治療システムの開発. 平成 25 年度 文部科学省運営費交付金プロジェクト事業 大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実 研究実績報告書, 2014; 261-267. (研究代表者: 吉田敬子, 神庭重信) .

池田真理, 上別府圭子. 愛着をテーマにした育児支援 育児期にある母親の抑うつと、母親のアタッチメント・スタイル, 子どもの気質, 夫からの育児サポートとの関係についての研究. 子どもと家族の双方に向けた心の問題の総合的な診断・治療システムの開発. 平成 25 年度 文部科学省運営費交付金プロジェクト事業 大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実 研究実績報告書, 2014; 294-299. (研究代表者: 吉田敬子, 神庭重信) .

西村良二, 清田晃生, 上別府圭子, 森岡由起子, 吉田敬子, 青木省三, 傳田健三, 原田謙, 本城秀次, 松本英夫. 大学医学部における専門的医師等の養成システムに関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 児童青年精神科領域における診断・治療の標準化に関する研究. 平成 22~24 年度 総合研究報告書, 2013; 107-110. (研究代表者: 齊藤万比古) .

西村良二, 清田晃生, 上別府圭子, 森岡由起子, 吉田敬子, 青木省三, 傳田健三, 原田謙, 本城秀次, 松本英夫. 大学医学部における専門的医師等の養成システムに関する研究—専門的看護研修内容と研修形態—. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 児童青年精神科領域における診断・治療の標準化に関する研究. 平成 24 年度 総括・分担研究報告書, 2013; 119-125. (研究代表者: 齊藤万比古) .

上別府圭子, 池田真理, 佐藤伊織. 日本家族看護学会 第 19 回学術集会の開催. メンタルヘルス岡本記念財団 研究助成報告集, 2013; 25: 165-168.

上別府圭子, 佐藤伊織, 副島堯史, 小林京子. QOL 研究センターからの報告. 長期フォローアップ委員会, 平成 25 年度 第 2 回 JPLSG 全体会議・合同班会議, 2013 年 11 月 15-17 日, 愛知県名古屋市.

上別府圭子. 保育保健調査結果の報告. 病児・病後児保育の実態把握と質向上に関する研究班第 3 回班会議, 2014 年 5 月 17 日, 東京都文京区.

上別府圭子. QOL 評価等看護学的視点を含めた小児造血器腫瘍臨床試験組織構築のための研究. 厚生労働科学研究委託費 (革新的がん医療実用化研究事業) 委託事業「小児造血器腫瘍 (リンパ系腫瘍) に対する標準治療確立のための研究」平成 26 年度 委託業務成果報告書, 2015 年 3 月 1 日.

上別府圭子. 看護職配置保育所における体調不良児の保育の実態調査. 厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業) 平成 26 年度 総括・分担研究報告書, 2015 年 3 月: 33-39.

上別府圭子. 利用者の病児・病後児保育の登録・利用状況及びその要因に関する調査. 厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業) 平成 26 年度 総括・分担研究報告書, 2015 年 3 月: 40-47.

佐藤伊織, 副島堯史, 小林京子, 上別府圭子. QOL 研究センターからの報告. 平成 25 年度第 1 回日本小児白血病・リンパ腫研究グループ (JPLSG) 合同班会議長期フォローアップ委員会, 2013 年 6 月 21-23 日, 愛知県名古屋市.

末次美子, 上別府圭子. 日本語版 Postpartum Bonding Questionnaire の開発、子どもと家族の双方に向けた心の問題の総合的な診断・治療システムの開発. 平成 24 年度 文部科学省運営費交付金プロジェクト事業 大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実 研究実績報告書, 2013; 241-243. (研究代表者: 吉田敬子, 神庭重信) .

森下美紀, 上別府圭子, 牛島定信. 一般病棟に入院中の転移・再発消化器がん患者の家族における、ケアの満足度と QOL に関する研究. メンタルヘルス岡本記念財団 研究助成報告集, 2012; 24: 89-96.

副島堯史, 佐藤伊織, 上別府圭子. QOL 研究センター報告. 第 40 回 JPLSG 長期フォローアップ委員会, 2014 年 7 月 21 日, 東京都文京区.

副島堯史, 佐藤伊織, 上別府圭子. QOL 研究センターからの報告. 平成 26 年度第 1 回合同班会議・JPLSG 全体会議, 2014 年 7 月 6 日, 愛知県名古屋市.

菊池良太, 小野稔, 絹川弘一郎, 水田耕一, 伊藤秀一, 上別府圭子. 日本における小児臓器移植患者の保護者の健康関連 Quality of Life. 公益財団法人明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 2014; 49: 97-106.

菊池良太, 小野稔, 絹川弘一郎, 水田耕一, 伊藤秀一, 上別府圭子. 日本における小児臓器移植患者の保護者の健康関連 Quality of Life. 2013 年度 (第 49 回) 明治安田こころの健康財団研究成果報告会, 2014 年 7 月 26 日, 東京都豊島区.

目麻里子. 介護役割を担う中年期女性有識者における Family-to-work spillover の関連要因の検討. 東海ジェンダー研究所 2014 年度個人助成受託者報告会, 2014 年 7 月 6 日, 愛知県名古屋市.

江本駿, 西村由希子. 患者・患者組織の QOL 調査研究のためのガイドライン (希少難治性疾患領域を対象に). 患者団体等が主体的に運用する疾患横断的な患者レジストリのデータの収集・分析による難病患者の QOL 向上及び政策支援のための基礎的知見の収集. 平成 26 年度 厚生労働省科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業) 成果報告会, 2015 年 3 月 8 日, 東京都文京区.

学会・研究発表

Kamibeppu K, Sato I, Higuchi A, Yanagisawa T, Murayama S, Kumabe T, Sugiyama K, Mukasa A, Saito N, Sawamura Y, Terasaki M, Shibui S, Takahashi J, Nishikawa R, Ishida Y. Impact of posttraumatic growth on self-esteem among survivors of childhood brain tumors. The 46th Congress of the International Society of Pediatric Oncology, 22-25 October 2014, Toronto, Canada.

Kamibeppu K, Kobayashi K, Murayama S, Nishigaki K, Ikeda M, Fujioka H, Konishi M, Sato I, Higuchi A, Hoshi Y. Relationship between parental bonding and posttraumatic stress symptoms of childhood cancer survivors. The 11<sup>th</sup> International Family Nursing Conference, 12-22 June 2013, Minneapolis, Minnesota, USA.

Ikeda M, Hayashi M, Kamibeppu K. The relationship between women's attachment style and postnatal depression. The 14<sup>th</sup> World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 14-18 June 2014, Edinburgh, UK.

Ikeda M, Kanai H, Ohata M, Tamai N, Sanada H, Kamibeppu K. Development and implementation of the social beauty care program for breast cancer patients. The 34<sup>th</sup> Academic Conference of Japan Academy of Nursing Science, 29-30 November 2014, Nagoya, Aichi, Japan.

Ikeda M, Sato I, Fukuzawa RK, Soejima T, Setoyama A, Kobayashi K, Kamibeppu K. Parents' perceptions and judgement formation process on their infant's quality of life. The 35<sup>th</sup> International Association for Human Caring Conference, 24-28 May 2014, Kyoto, Kyoto, Japan.

Ikeda M, Kamibeppu K. The impact of child temperament and mother-child interactions and partners' support, on childrearing mothers' mental health. The 9<sup>th</sup> International Nursing Conference & 3<sup>rd</sup> World Academy of Nursing Science, 16-18 October 2013, Seoul, Korea.

Ikeda M, Nishigaki K, Kida M, Setoyama A, Kobayashi K, Kamibeppu K. The development and feasibility study of maternal mental health promotion program (MMHPP) for women during their pregnancy. The 11<sup>th</sup> International Family Nursing Conference, 19-22 June 2013, Minneapolis, Minnesota, USA.

Fukuzawa RK, Sugimoto K, Tomoda H, Nagae M, Sato T, Sato I, Amiya R, Ikeda M, Kamibeppu K. Cross-cultural comparison of perinatal experiences between Japanese and U.S. women. The 34th Academic Conference of Japan Academy of Nursing Science, 29-30 November 2014, Nagoya, Aichi, Japan.

Rosenthal A, Fukuzawa RK, Altfeld S, Peacock N. Guiding sleep: a cross-national comparison of SIDS prevention guidelines. The 142<sup>nd</sup> American Public Health Association Annual Meeting and Exposition, 15-19 November 2014, New Orleans, Louisiana, USA.

Amiya RM, Kamibeppu K. Perceived family support and difficulties predict HIV/AIDS-related somatic symptom burden and internalized stigma: longitudinal results from the Positive Living with HIV (PoLH) Study in the Kathmandu Valley, Nepal. The 34<sup>th</sup> Academic Conference of Japan Academy of Nursing Science, 29-30 November 2014, Nagoya, Aichi, Japan.

Amiya RM, Poudel-Tandukar K, Pandey BD, Jimba M, Poudel KC. Barriers and facilitators to self-reported adherence to antiretroviral therapy among people living with HIV/AIDS in the Kathmandu Valley, Nepal. The 20<sup>th</sup> International AIDS Conference, 20-25 July 2014, Melbourne, Australia.

Amiya RM, Poudel-Tandukar K, Pandey BD, Jimba M, Poudel KC. Changes in perceived family support predict subsequent suicidal ideation among people living with HIV/AIDS in the Kathmandu Valley, Nepal: the double-edged sword of family relationships. The 20<sup>th</sup> International AIDS Conference, 20-25 July 2014, Melbourne, Australia.

Amiya RM, Rodriguez-Fernandez R. Non-communicable disease risk factors among health care providers in Timika, Papua Province, Indonesia: a neglected health system bottleneck. The 3<sup>rd</sup> Global Symposium on Health Systems Research, 30 September-3 October 2014, Cape Town, South Africa.

Amiya RM, Rodriguez-Fernandez R. Toward a sustainable approach to tackling the escalating burden of non-communicable disease in Papua Province, Indonesia. The Inaugural Conference on Social Sciences and Sustainability, 1-3 December 2014, Hiroshima, Hiroshima, Japan.

Kiritani M, Ikeda M, Kamibeppu K. Maintenance of daily life after the loss of [a] family member to suicide. The 35<sup>th</sup> International Association for Human Caring Conference, 24-28 May 2014, Kyoto, Kyoto, Japan.



Soejima T, Sato I, Takita J, Koh K, Maeda M, Ida K, Kamibeppu K. The influences of school reentry support on relationships that adolescents with cancer share with peers and teachers. The 46th Congress of the International Society of Pediatric Oncology, 22-25 October 2014, Toronto, Canada.

Kikuchi R, Ono M, Kinugawa K, Mizuta K, Ito S, Kamibeppu K. Health-related quality of life in parents of pediatric organ transplant recipients in Japan. The 8th Congress on Pediatric Transplantation, 28-31 March 2015, San Francisco, California, USA.

Mizukoshi M, Ikeda M, Kamibeppu K. Husband's experiences of primiparas with mental disease during perinatal periods. The 35<sup>th</sup> International Association for Human Caring Conference, 24-28 May 2014, Kyoto, Kyoto, Japan.

Sakka M, Ikeda M, Sato I, Kamibeppu K. Correlates of family-to-work spillover among working middle-aged female caregivers in Japan. The 17<sup>th</sup> East Asian Forum of Nursing Scholars, 20-21 February 2014, Manila, the Philippines.

Kobayashi K, Nakagami-Yamaguchi E, Hayakawa A, Adachi J, Hara J, Tokimasa S, Ohta H, Hashii Y, Rikiishi T, Sawada M, Kuriyama K, Kohdera U, Kamibeppu K, Kawasaki H, Oda M, Hori H. Health-related quality of life in children with acute lymphoblastic leukemia who were treated [in] the Japan Association of Childhood Leukemia Study ALL02-Revised. The 45th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, 25-28 September 2013, Hong Kong, China.

Ishibashi A, Kamibeppu K. Portfolio of enhancing resilience for adolescents and young adults with cancer. The 46th Congress of the International Society of Paediatric Oncology, 22-25 October 2014, Toronto, Canada.

上別府圭子. 包括的な育児支援プログラムをふまえた今後の新たな助産師の役割 (Maternal Mental Health Promotion Program: MMHPP をふまえて) . 妊産婦のメンタルケアと育児支援研究連絡会議, 2013 年 12 月 15 日, 東京都文京区.

木多美晴, 池田真理, 上別府圭子. 個別指導における MMHPP (Maternal Mental Health Promotion Program) の実施可能性の評価. 日本家族看護学会第 20 回学術集会, 2013 年 8 月 31 日-9 月 1 日, 静岡県静岡市.

池田真理. 子育て期にある母親の抑うつと、子どもの気質、夫からの育児支援との関係についての研究. 日本家族看護学会第 20 回学術集会, 2013 年 8 月 31 日-9 月 1 日, 静岡県静岡市.

池田真理, 上別府圭子. 産後に発生する要因が産後うつ病発症に及ぼす影響に関する研究. 第33回日本看護科学学会学術集会, 2013年12月6-7日, 大阪府大阪市.

池田真理, 上別府圭子. 母親の妊娠期のアタッチメント・スタイルと育児期の抑うつに関する研究—児の気質、夫婦関係に着目して—. 第11回日本周産期メンタルヘルス研究会学術集会, 2014年11月13-14日, 埼玉県さいたま市.

佐藤伊織, 樋口明子, 柳澤隆昭, 武笠晃丈, 井田孔明, 澤村豊, 杉山一彦, 斉藤延人, 隈部俊宏, 寺崎瑞彦, 西川亮, 石田也寸志, 上別府圭子. 脳腫瘍をもつ子どもに対する病気についての説明の程度. 第32回日本脳腫瘍学会学術集会, 2014年11月30日-12月2日, 千葉県浦安市.

田中將太, 佐藤伊織, 武笠晃丈, 成田善孝, 上別府圭子, 斉藤延人. 脳腫瘍患者を対象とした MDASI-BT 日本語版の信頼性・妥当性の評価研究. 第32回脳腫瘍学会学術集会, 2014年11月30日-12月2日, 千葉県浦安市.

佐藤伊織, 上別府圭子. 複数の評価者(親子)・複数の尺度(年代毎)による QOL の評価と解析. 第2回 QOL/PRO 研究会学術集会, 2015年2月28日, 東京都港区.

森下美紀, 上別府圭子. (示説-3 緩和ケアと家族) 一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族における、ケアの満足度に関する質的研究. 日本家族看護学会第20回学術集会, 2013年8月31日-9月1日, 静岡県静岡市.

森下美紀. がん拠点病院を含む一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者における、ケアの満足度と Quality of Life に関する研究. 第3回看護系博士論文発表会, 2015年3月19日, 東京都文京区.

大塚寛子. 妊娠期からの親向けの乳幼児予防接種教育プログラムを用いた介入研究. 第3回看護系博士論文発表会, 2015年3月19日, 東京都文京区.

瀬戸山有美, 池田真理, 鈴木涼子, 小林千恵, 上別府圭子. 入院中の小児がん患児における睡眠の客観的評価とその関連要因の探索. 第11回日本小児がん看護学会, 2013年11月29日-12月1日, 福岡県福岡市.

副島堯史, 佐藤伊織, 上別府圭子. 思春期の小児がん経験者における復学支援—同級生・担任からの Perceived Social Support に焦点を当てて—. 第 11 回日本小児がん看護学会, 2013 年 11 月 29 日-12 月 1 日, 福岡県福岡市.

菊池良太, 小野稔, 絹川弘一郎, 水田耕一, 伊藤秀一, 上別府圭子. 日本における小児臓器移植患者の保護者の健康関連 QOL. 第 50 回日本移植学会総会, 2014 年 9 月 10-12 日, 東京都新宿区.

水越真依, 池田真理, 上別府圭子. パニック障害を有する妻を支える夫の初めての育児体験. 第 6 回日本不安障害学会学術大会, 2014 年 2 月 1 日-2 日, 東京都文京区.

江本駿, 池田真理, 上別府圭子. 難病の患者会・家族会の運営と、それらを支援する社会資源についての実態調査. 日本家族看護学会第 20 回学術集会, 2013 年 8 月 31 日-9 月 1 日, 静岡県静岡市.

江本駿, 池田真理, 上別府圭子. 難病の患者会・家族会と、他の会・団体との関わりかたに関する質的調査. 第 2 回日本難病医療ネットワーク学会学術集会, 2014 年 11 月 14-15 日, 鹿児島県鹿児島市.

田中一未, 池田真理, 上別府圭子. がんで母親を亡くした「父親と子ども」の相互作用—父親の認識から—. 第 18 回日本緩和医療学会学術大会, 2013 年 6 月 21-22 日, 神奈川県横浜市.

岡部花枝, 佐藤伊織, 池田真理, 上別府圭子. 中規模事業所に勤務する中年期男性の運動に関連する要因の検討—労働者のセルフ・エフィカシーと配偶者からのソーシャルサポートに着目して—. 第 73 回日本公衆衛生学会総会, 2014 年 11 月 5-7 日, 栃木県宇都宮市.

大野真実, 上別府圭子. 精神科専門職者による精神疾患を有する女性への子育て支援. 第 110 回日本精神神経学会学術総会, 2014 年 6 月 26-28 日, 神奈川県横浜市.

#### 講演・シンポジウムなど

Kamibeppu K. (Symposist) Impact of postpartum depression on children and a program of care for mother-infant bonding disorders. Multi-disciplinary approaches for perinatal mental health in Japan. The 6<sup>th</sup> World Congress on Women's Mental Health –Trauma, Depression and Resilience–, 22-25 March 2015, Tokyo, Tokyo Metropolis, Japan.

Kodate N, Fukuzawa RK. Sharing knowledge, shaping the future of the welfare society in Europe and Japan. Oral presentation at the Ireland-Japan Social Science Symposia, 21 June 2014, The University of Tokyo, Tokyo, Tokyo Metropolis, Japan.

Emoto S. (Symposist) Periodic ACTH discharge and cyclic vomiting syndrome in Japan. The 11<sup>th</sup> CVSA Adult and Family Conference, 27-29 Jun 2014, Milwaukee, Wisconsin, USA.

上別府圭子 (基調講演). 臨床におけるナラティブとエビデンス. 医師・看護師・研究者の連携を目指して—今、改めて、「エビデンス」とは—. 第3回東大看護研究シンポジウム, 2014年3月1日, 東京都文京区.

上別府圭子. 周産期のメンタルヘルスと子どもの虐待予防—個別ケアとシステムによる支援—. 公益社団法人新潟県助産師会 妊産婦・新生児・乳幼児等支援者研修会, 2013年4月27日, 新潟県新潟市.

上別府圭子. 子どもたちは病気や治療をどう経験したか. 東京大学保健学同窓会 2013年度総会, 2013年5月18日, 東京都文京区.

上別府圭子. 産後うつ病/うつ病を患った女性と子育て. ワークショップ 2: 女性のうつ病と子育て. 第42回日本女性心身医学会学術集会, 2013年7月27-28日, 東京都千代田区.

上別府圭子. 「妊娠期からはじめる愛着形成支援」. 「妊娠期からはじめる愛着形成支援」研修. 公益社団法人 日本看護協会 神戸研修センター, 2013年11月7日, 兵庫県神戸市.

上別府圭子 (招待講演). 子どもの Quality of Life を測る: 脳腫瘍をもつ子どもの場合. 第4回相模原・北里神経科学フォーラム, 2013年12月16日, 神奈川県相模原市.

上別府圭子. 育児ストレスから楽しい子育て. 第2回ドナルド・マクドナルド・ハウス 東大医療講演会, 2014年5月17日, 東京都文京区.

宅香菜子, 清水研, 小澤美和, 上別府圭子. 小児脳腫瘍経験者の自尊感情に、心的外傷後成長が及ぼす影響. シンポジウム『Posttraumatic Growth 研究の現在と今後の展望そして臨床への示唆』. 第13回日本トラウマティック・ストレス学会, 2014年5月18日, 福島県福島市.

上別府圭子 (会長シンポジウム) . 小児がん経験者の PTSS—心理的問題. 「小児がんサバイバーシップ」(第 12 回学術集会長/日本小児血液・がん学会 合同シンポジウム) . 第 12 回日本臨床腫瘍学会学術集会, 2014 年 7 月 17 日-19 日, 福岡県福岡市.

上別府圭子. 理系も文系 (人間) も好きな人が選ぶ学科 医学部健康総合科学科 (看護学コース) . 高校生のための東京大学オープンキャンパス 2014, 2014 年 8 月 7 日, 東京都文京区.

上別府圭子. 小児がん患者の家族のアセスメントについて. 第 11 回小児がん看護研修会, 2014 年 8 月 23 日, 東京都世田谷区.

上別府圭子. EPDS 等三点の質問票の使い方—母親のメンタルヘルスと子育て支援—. 台東区乳児家庭全戸訪問従事者勉強会, 2014 年 9 月 29 日, 東京都台東区.

上別府圭子. シンポジウム 3 「妊娠期からの産後うつ病の重症化予防」. 第 55 回日本母性衛生学会学術集会, 2014 年 9 月 13 日-14 日, 千葉県千葉市.

上別府圭子 (主宰) . 事例研究を投稿しよう. 研究促進委員会・編集委員会 共催企画セミナー, 日本家族看護学会第 20 回学術集会, 2013 年 8 月 31 日-9 月 1 日, 静岡県静岡市.

上別府圭子 (ファシリテーター) , 山本則子, 安塚則子. 研究促進委員会・編集委員会 共催企画セミナー 事例検討を投稿しよう. 日本家族看護学会第 20 回学術集会, 2013 年 8 月 31-9 月 1 日, 静岡県静岡市.

上別府圭子 (コーディネーター) . フォーラム「精神障害のある人の自立とやさしい街づくり」. メンタルヘルスの集い (第 28 回日本精神保健会議) , 2014 年 3 月 1 日, 東京都千代田区.

泊祐子, 上別府圭子. 査読者は『こう見ている』—学会誌に掲載される論文を書くために—. 理事会企画: 編集委員会・研究促進委員会合同企画セミナー. 第 21 回日本家族看護学会学術集会, 2014 年 8 月 9 日-10 日, 岡山県倉敷市.

上別府圭子, 内田雅代, 小原美江, 佐藤伊織. 実践報告を投稿して実践の知をひろめよう! —臨床での実践知を「実践報告」として論文にまとめ、投稿する意義とその執筆過程—. 第 12 回日本小児がん看護学会学術集会, 2014 年 11 月 28-30 日, 岡山県岡山市.

上別府圭子（コメンテーター）．第 22 回看護研究実践報告会．東京都看護協会東部地区支部，2013 年 11 月 16 日，東京都文京区．

上別府圭子（指定討論者）．事例 1 小児がんの子どもと母親への心理的支援—終末期 いのちの灯を見つめ寄り添いながら—／事例 2 ひきこもり家族相談における見立てと介入についての一考察．事例研究シンポジウム，日本心理臨床学会第 32 回秋季大会，2013 年 8 月 25 日-28 日，神奈川県横浜市．

上別府圭子（ラジオ番組）．医学講座「保育所に看護師、保健師等を配置しよう」．ラジオ NIKKEI，2013 年 12 月 10 日 20:40-21:00．

上別府圭子（アドバイザー）．シンポジウム「学校保健現場と医療・心理専門家の共通認識をはかる—学校保健と医療・心理・研究の協働に向けて—」．第 6 回日本不安障害学会学術大会，2014 年 2 月 1 日-2 日，東京都文京区．

三木とみ子，大島紀人，上別府圭子（アドバイザー），高野明，渡邊慶一郎，大沼久美子．シンポジウム「学校保健現場と医療・心理専門家の共通認識をはかる」—学校保健と医療・心理・研究の協働に向けて—．第 6 回日本不安障害学会学術大会，平成 26 年 2 月 1-2 日，東京．

上別府圭子（座長）．推薦演題 6 題．日本家族看護学会第 20 回学術集会，2013 年 8 月 31 日-9 月 1 日，静岡県静岡市．

上別府圭子（司会）．教育講演 村瀬嘉与子「子どもへの心理療法のこれから—現実生活を理論や技法で繋ぐ—」．第 54 回日本児童青年精神医学会総会，2013 年 10 月 10 日-12 日，北海道札幌市．

上別府圭子（座長）．シンポジウム「移植・再生医療～看護師だからできること」．第 9 回日本移植・再生医療看護学会学術集会，2013 年 10 月 26 日-27 日，東京都文京区．

上別府圭子（座長）．一般演題「看護・患者ケアにおける医療安全」．第 12 回日本臨床医学リスクマネジメント学会・学術集会，2014 年 5 月 22 日-23 日，東京都千代田区．

上別府圭子（司会）．一般口演「リエゾン・治療連携」．第 55 回日本児童青年精神医学会総会，2014 年 10 月 11 日-13 日，静岡県浜松市．

上別府圭子 (座長) . 看護一般口演「闘病支援・思春期支援」. 第 12 回日本小児がん看護学会学術集会, 2014 年 11 月 28 日-30 日, 岡山県岡山市.

上別府圭子 (座長) . 特別講演「実践を変える研究」. 第 4 回東大看護研究シンポジウム, 2015 年 1 月 31 日, 東京都文京区.

上別府圭子 (座長) . 特別講演「QOL という指標を、何に活用するか?」. QOL 研究センターセミナー「患者家族の生活の質 QOL を高めるための研究と実践」, 2015 年 3 月 21 日, 東京都文京区.

上別府圭子 (座長) . 特別講演「エビデンスのある QOL 研究を目指して」. QOL 研究センターセミナー「患者家族の生活の質 QOL を高めるための研究と実践」, 2015 年 3 月 21 日, 東京都文京区.

佐藤伊織 (座長) . 研究紹介. QOL 研究センターセミナー「患者家族の生活の質 QOL を高めるための研究と実践」, 2015 年 3 月 21 日, 東京都文京区.

佐藤伊織, 副島堯史, 上別府圭子. QOL 研究ミニレクチャー. 平成 26 年度第 1 回合同班会議・JPLSG 全体会議, 2014 年 7 月 6 日, 愛知県名古屋市.

福澤利江子. 英語のニュアンスを知ったら発表は怖くない. 第 23 回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会ワークショップ, 2014 年 5 月 17 日, 埼玉県さいたま市.

三砂ちづる, 福澤 (岸) 利江子, 持田聖子. 子産み・子育てしやすい社会へドゥーラの発想を軸に考えるー. 座談会シンポジウム, ベネッセ教育総合研究所, 2014 年 9 月 25 日, 東京都新宿区.

福澤 (岸) 利江子. ドゥーラ: 産む女性とその家族を支える社会を目指して. いいお産の日 in はままつ, 2014 年 11 月 3 日, 静岡県浜松市.

福澤利江子. 「エモーショナル・サポート」とは何か. その重要性. 東京都板橋区健康推進課研修, 2015 年 2 月 27 日, 東京都板橋区.

森下美紀. 終末期がん患者の家族における QOL —一般病棟の消化器がん患者の家族介護者における、ケアの満足度に着目して—. QOL 研究センターセミナー「患者家族の生活の質 QOL を高めるための研究と実践」, 2015 年 3 月 21 日, 東京都文京区.

副島堯史. 小児がん経験者に対する復学支援. QOL 研究センターセミナー「患者家族の生活の質 QOL を高めるための研究と実践」, 2015 年 3 月 21 日, 東京都文京区.

菊池良太. 小児臓器移植患者の保護者の健康関連 QOL. QOL 研究センターセミナー「患者家族の生活の質 QOL を高めるための研究と実践」, 2015 年 3 月 21 日, 東京都文京区.

#### 一般雑誌・新聞その他

上別府圭子 (巻頭のことば). 日本の小児がん対策の最近の動き. 保健の科学, 2013; 55(4): 217.

上別府圭子 (寄稿). 子どもたちは病気や治療をどう経験したか. 同窓会ニューズレター (東京大学保健学同窓会), 2013; 40: 2.

上別府圭子 (取材). 産後うつ病の予防とケア、育児支援に向けて. 精神科医療求職ガイド 2013, 2013: 31-38.

上別府圭子 (巻頭のことば). 当事者と専門家とのコラボレーションによる啓発活動. 保健の科学, 2014; 56(1): 1.

上別府圭子 (あとがき). 保健の科学, 2014; 56(2): 144.

上別府圭子 (あとがき). 保健の科学, 2013; 55(6): 432.

上別府圭子 (提言). ワークライフ インテグレーション「仕事を生活 (人生) に統合すること」について. 家族看護学研究, 2014; 19(2): 89.

上別府圭子 (書評). がんとエイズの心理臨床 医療にいかすところのケア (矢永由里子, 小池眞規子編). 精神療法, 2014; 40(3): 111.

上別府圭子 (編集後記). 家族療法研究. 2014; 31(1): 127.

上別府圭子 (コーディネーター). 総合討論 障害のある人の自立とやさしい街づくり. 心と社会, 2014; 156: 54-66.



上別府圭子 (エッセイ) . 治療への抵抗を家族看護の cue ととらえる. 精神療法, 2014; 40(5): 56-57.

上別府圭子 (書評) . バイオサイコソーシャルアプローチ 生物・心理・社会的医療とは何か? (渡辺俊之, 小森康永著) . 精神療法, 2014; 41(1): 120.

上別府圭子 (あとがき) . 保健の科学, 2014; 56(10): 720.

上別府圭子 (巻頭のことば) . 子ども虐待予防に向けた日本の取り組み. 保健の科学, 2014; 56(11): 721.

福澤 (岸) 利江子 (連載) . 「ドゥーラ CASE 編」, ベネッセ教育総合研究所チャイルド・リサーチ・ネット, ドゥーラ研究室. <http://www.blog.crn.or.jp/lab/03/>  
第1回「「ドゥーラ」という言葉をより広く」 (2014年8月8日)  
第2回「映画から学ぶイギリスのドゥーラ (前編)」 (2014年9月26日)  
第3回「映画から学ぶイギリスのドゥーラ (後編)」 (2014年10月3日)  
第4回「ドゥーラと文化: 世界を旅するドゥーラ, 木村章鼓さん」 (2014年11月28日)  
第5回「ドゥーラと文化: 世界を旅するドゥーラ, 木村章鼓さん (考察回)」 (2015年3月13日)

岸利江子, 福澤浩昭, 飯村ブレット, 木村章鼓 (翻訳) . マイクロバース. (2014) / Toni H, Wakeford A. Micro Birth. Alt Films Ltd. London, UK. (Original work in 2014).

福澤 (岸) 利江子. 研究者・教育者として助産師を追求する. 助産雑誌, 2014; 68(12): 1056-1060.

福澤 (岸) 利江子. 書評 ナイチンゲール伝 図説看護覚え書とともに (茨木保著. 医学書院) . 助産雑誌, 2014; 68(6): 519.

福澤利江子. 書評 やさしく学べる乳幼児の発達心理学: 妊娠、出産から子育てまで (田中亜裕子著. 創元社) . 心と社会, 2015; 46(1): 118.

## 1-2. 研究活動費

平成 26 年度

文部科学研究費補助金（基盤研究（B））「被災地の小児がん患者と家族が経験する重層的なトランジションを支える看護のあり方」（課題番号 26293469）3,600 千円

上別府圭子

文部科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「エンドオブライフケアにおける家族看護の特色あるケアの同定と普遍化」（課題番号 26670973）1,200 千円

上別府圭子

厚生労働科学研究費補助金（革新的がん医療実用化研究事業）「小児造血器腫瘍（リンパ系腫瘍）に対する標準治療確立のための研究」（課題番号 H26-革新的がん-一般-068）1,000 千円

上別府圭子（研究分担者）

厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）「病児・病後児保育の実態把握と質向上に関する研究」（課題番号 H25-次世代-一般-006）0 千円

上別府圭子（研究分担者）

文部科学研究費補助金（若手研究（B））「小児がんを持つ子どものきょうだいに病気の説明を行うための親への支援の開発」（課題番号 24792488）1,040 千円

佐藤伊織

文部科学研究費補助金（若手研究（B））「周産期から育児期の支援者の体験と問題意識」（課題番号24792525）1,170万円

福澤利江子

公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成「成人期の小児がん経験者における就労状況・職務パフォーマンス・職務満足度：マルチレベル分析による関連要因の探索」1,000 千円

副島堯史

第 23 回公益財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団（平成 26 年度）研究助成（国内共同研究-満 39 歳以下）「小児臓器移植患者の日本語版健康関連 QOL 尺度の開発」930 千円

菊池良太

(財)メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「高次脳機能障害になった父親に関する母親と子どものオープンなコミュニケーションに関連する要因の探索」300千円

高梨志帆

公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団「在宅で生活する慢性疾患をもつ子どもと母親に対する保育所からの支援と母親の育児ストレスの関連についての研究」460千円

松原由季

公益財団法人循環器病研究振興財団循環器疾患看護研究助成「先天性心疾患の出生前診断を受けた子どもに対する母親の気持ち-妊娠中から産後にかけての経時的な変化とその契機-」200千円

丸山暁子

平成25年度

産学連携-受託研究(児童関連サービス調査研究等事業)「低出生体重児の母親の出産体験とボンディングに関する研究(九州大学再委託)」150千円

上別府圭子(研究分担者)

厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)「病児・病後児保育の実態把握と質向上に関する研究」(課題番号 H25-次世代-一般-006) 0千円

上別府圭子(研究分担者)

公益財団法人がんの子どもを守る会治療研究助成「患者・家族の視点を小児がん臨床研究へ導入するために—QOL研究センターの構築—」300千円

上別府圭子, 佐藤伊織, 池田真理, 福澤利江子, 副島堯史, 瀬戸山有美, 前田美穂, 石田也寸志

文部科学研究費補助金(若手研究(B))「小児がんを持つ子どものきょうだいに病気の説明を行うための親への支援の開発」(課題番号 24792488) 1,170千円

佐藤伊織

一般財団法人東京医学会医学研究助成「小児 B 前駆細胞性急性リンパ性白血病治療の無作為化比較試験による QOL 向上の検証」1,000千円

佐藤伊織, 石田也寸志, 康勝好, 前田美穂, 堀部敬三, 齊藤明子, 副島堯史

第 21 回ファイザーヘルスリサーチ振興財団国内共同研究（満 39 歳以下）研究助成「母親への乳幼児予防接種に関する教育プログラムの開発とその評価」1,000 千円

大塚寛子, 堀成美, 上別府圭子

第 49 回公益財団法人明治安田こころの健康財団研究助成「小児臓器移植患者の親の Quality of Life —移植患者の養育の支援と家族機能の観点から—」500 千円

菊池良太, 上別府圭子

平成 25 年度（公財）メンタルヘルス岡本記念財団研究活動助成金「気分障害を持つ妻と共に初めての育児に臨む夫の育児開始時期の体験」300 千円

水越真依, 池田真理, 上別府圭子

第17回公益財団法人東海ジェンダー研究所個人研究助成「ワーク・ライフ・バランスに関するアンケート調査—女性有職者における仕事と介護の両立支援に焦点を当てて—」300 千円

目麻里子

### 1-3. 学内外の公的活動

上別府圭子

日本看護系大学協議会 監事	(2013年6月～)
日本精神衛生学会 常任理事	(2003年～)
日本小児がん看護学会 副理事長	(2013年1月～)
日本家族研究・家族療法学会 副会長	(2012年12月～)
日本家族看護学会 理事	(2010年4月～)
日本精神衛生会 理事	(2012年6月～)
日本児童青年精神医学会 理事	(2013年10月～)
日本小児保健協会 代議員	(2009年1月～)
日本乳幼児医学・心理学会 評議員	(2010年12月～)
日本小児看護学会 評議員	(2013年1月～)
日本小児白血病リンパ腫研究グループ (JPSLG) 研究審査委員	(2012年4月～)
「保健の科学」 編集委員	(2010年4月～)
第6回国際女性精神保健学会 組織委員会委員	(2013年9月～)
第9回国際早期精神病学学会 組織委員会委員	(2013年11月～)

池田真理

日本精神衛生会「心と社会」編集委員	(2012年3月～)
国立音楽大学 非常勤講師	(2012年4月～)
日本家族研究家族療法学会 第30回大会 運営委員	(2012年10月～2013年6月)
日本家族看護学会 専任査読委員	(2013年8月～)
日本家族看護学会 研究促進委員	(2013年4月～)
日本質的心理学会 『質的心理学フォーラム』編集委員	(2013年4月～)

佐藤伊織

日本小児がん看護学会 編集委員	(2013年1月～)
日本小児がん看護学会 学術検討委員	(2014年1月～)
日本家族看護学会 専任査読委員	(2013年8月～)
都立大塚病院 研修講師	(2014年4月～)

福澤利江子

チャイルド・リサーチ・ネット『ドゥーラ研究室』 在外研究員 (2005年8月～)

International Partner for Education, Inc. ウェブマスター (2006年5月～)

HealthConnect One Community-based Doula Leadership Institute (HRSA) 諮問委員  
(2008年12月～)

社団法人ドゥーラ協会 顧問 (2012年3月～)

ニチイ学館 産前産後ママヘルパー講座 監修 (2014年1月～)

網谷・マリー・レイチェル

The Rebuild Japan Initiative Foundation (RJIF), Visiting Fellow (2011年12月～)

Department of Health Policy, National Center for Child Health and Development, Adjunct Research  
Fellow (2014年3月～)

Non-Communicable Disease Asia Pacific Alliance (NCDAPA), Deputy Director (2015年1月～)

## 2. 学位論文（卒業論文・修士論文・博士論文）

平成 25 年度

### 卒業論文

吉備 智史：

日本における小児に対する「いのちの教育」の実践に関する研究

### 修士論文

岡部 花枝：

中規模事業所に勤務する中年期男性の運動に関連する要因の検討

—労働者のセルフ・エフィカシーと配偶者からのソーシャルサポートに着目して—

菊池 良太：

Health-related quality of life in parents of pediatric organ transplant recipients

目 麻里子：

Correlates of family-to-work spillover among working middle-aged female caregivers in

Japan

水越 真依：

精神疾患を有する初産婦の周産期における夫の体験

### 博士論文

桐谷 麻美：

自死遺族が望むように生活できる自分になる過程

藤岡 寛：

重症心身障がい児を養育する家族のエンパワメントに関する実証的研究

—養育肯定感への関連の検討—

平成 26 年度

修士論文

李 孝媛 :

Family factors related to elementary school children's handwashing behaviors in the Philippines

江本 駿 :

Qualitative study exploring the experience of post-diagnosis uncertainty among patients with ultra-orphan immunological diseases

高梨 志帆 :

Factors related to mother-child communication openness about fathers with neurobehavioural sequelae after brain injury

藤田 彩子 :

Future long-term care setting preferences and related factors among middle-aged and older people living with HIV

松原 由季 :

The effect of support from day care centers with nurses on staff on parenting stress among mothers of children with chronic diseases

丸山 暁子 :

出生前に先天性心疾患の診断を受けた子どもに関する母親の時間的展望  
—「普通」という意味の経時的な変容とその契機—

博士論文

大塚(小野) 寛子 :

妊娠期からの親向けの乳幼児予防接種教育プログラムを用いた介入研究

森下 美紀 :

がん拠点病院を含む一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者における、ケアの満足度と Quality of Life に関する研究



### 3. 教室カンファレンス

平成 25 年度

4 月 2 日

オリエンテーション

4 月 9 日

副島 堯史 (論文抄読)

Parker PA, Baile WF, Moor CD, Cohen L. Psychosocial and demographic predictors of quality of life in a large sample of cancer patients. *Psycho-oncology*. 2003; 12(2): 183-193.

菊池 良太 (研究発表)

小児臓器移植患者の親の Health-related quality of life—養育の負担感と家族機能に焦点を当てて—

4 月 16 日

瀬戸山 有美 (論文抄読)

Hiscock H, Bayer JK, Hampton A, Ukoumunne OC, Wake M. Long-term mother and child mental health effects of population-based infant sleep intervention: cluster-randomized, controlled trial. *Pediatrics*. 2008; 22(3): e621-627.

岡部 花枝 (研究発表)

中年期夫婦における身体活動・運動と自己効力感

4 月 23 日

藤岡 寛 (研究発表)

Empowerment of families rearing children with severe motor and intellectual disabilities.

目 麻里子 (研究発表)

女性有職者における介護評価がファミリー・ワーク・スピルオーバーに及ぼす影響

4 月 30 日

大塚 寛子 (研究発表)

Development and evaluation of health communication programs on childhood immunization education for parents in the perinatal period.

水越 真依 (研究発表)

気分障害をもつ妻とともに初めての育児に臨む夫の体験

5月7日

松原 由季 (論文抄読)

Jepson RG, Harris FM, Platt S, Tannahill C. The effectiveness of interventions to change six health behaviours: a review of reviews. *BMC Public Health*. 2010; 10: 538.

藤田 彩子 (論文抄読)

Kohli R, Purohit V, Karve L, Bhalerao V, Karvande S, Rangan S et al. Caring for caregivers of people living with HIV in the family: a response to the HIV pandemic from two urban slum communities in Pune, India. *PLoS One*. 2012; 7(9): e44989.

5月14日

李 孝媛 (論文抄読)

O'Reilly CE, Freeman MC, Ravani M, Mwaki A, Ayalo M, Ombeki S, et al. The impact of a school-based safe water and hygiene programme on knowledge and practices of students and their parents: Nyanza Province, western Kenya, 2006. *Epidemiology & Infection*. 2008; 136(1): 80-91.

江本 駿 (論文抄読)

Pistrang N, Barker C, Humphreys K. Mutual help group for mental health problems: a review of effectiveness studies. *American Journal of Community Psychology*. 2008; 42(1-2): 110-121.

5月21日

高梨 志帆 (論文抄読)

Boerner K, Wortman CB, Bonanno GA. Resilient or at risk? A 4-year study of older adults who initially showed high or low distress following conjugal loss. *The Journal of Gerontology, Series B, Psychological Sciences and Social Sciences*. 2005; 60(2): 67-73.

森下 美紀 (研究発表)

Quality of life and satisfaction with care among family members of patients with terminal digestive cancer hospitalized in a general ward.

5月28日

丸山 暁子 (論文抄読)

Rychik J, Donaghue DD, Levy S, Fajardo C, Combs J, Zhang X, et al. Maternal psychological stress after prenatal diagnosis of congenital heart disease. *The Journal of Pediatrics*. 2012; 162(2): 302-307.

副島 堯史 (研究発表)

Quality of life, self-management, and social support on adolescents with cancer following hematopoietic stem cell transplantation.

6月4日

目 麻里子 (論文抄読)

Pedersen D, Minnotte KL, Kiger G, Mannon SE. Workplace policy and environment, family role quality, and positive family-to-work spillover. *Journal of Family and Economic Issues*. 2009; 30(1): 80-89.

瀬戸山 有美 (研究発表)

乳児の泣きについて

6月11日

岡部 花枝 (論文抄読)

Gellert P, Ziegelmann JP, Warner LM, Schwarzer R. Physical activity intervention in older adults: does a participating partner make a difference? *European Journal of Ageing*. 2011; 8: 211-219.

藤岡 寛 (研究発表)

Empowerment of families rearing children with severe motor and intellectual disabilities.

6月25日

菊池 良太 (論文抄読)

Pinson CW, Feurer ID, Payne JL, Wise PE, Shockley S, Speroff T. Health-related quality of life after different types of solid organ transplantation. *Annals of Surgery*. 2000; 232(4): 597-607.

大塚 寛子 (研究発表)

Development and evaluation of childhood immunization education programs for parents in the perinatal period.

7月2日

水越 真依 (論文抄読)

Turner KM, Chew-Graham C, Folkes L, Sharp D. Women's experiences of health visitor delivered listening visits as a treatment for postnatal depression: a qualitative study. *Patient Education and Counseling*. 2010; 78(2): 234-239.

江本 駿 (研究発表)

20分ほどでわかる Self Help Group / 患者会 役割と現状と課題

藤田 彩子 (研究発表)

高齢 HIV 感染者と家族の療養生活 (仮)

7月9日

水越 真依 (研究発表)

気分障害をもつ妻と共に初めての育児に臨む夫の体験～インタビュー訓練～

松原 由季 (研究発表)

保育所における健康教育 看護職の立場

李 孝媛 (研究発表)

下痢性疾患と手洗いの学校、家族教育

7月16日

目 麻里子 (研究発表)

ワークライフバランスに関するアンケート調査—介護と仕事の両立支援に焦点を当てて—

高梨 志帆 (研究発表)

急変死亡した患者の遺族の悲嘆反応とその支援

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患と出生前診断された胎児とその家族

7月23日

岡部 花枝 (研究発表)

中規模事業所に勤務する中年期男性労働者の身体活動量に関する要因の検討 —配偶者の身体活動やサポートとの関連に焦点をあてて—

小町 美由紀 (研究発表)

集中治療室に入室した患者の家族における急性ストレス障害に関する研究

7月30日

今井 紗緒 (論文抄読)

Osaki K, Hattori T, Kosen S. The role of home-based records in the establishment of a continuum of care for mothers, newborns, and children in Indonesia. *Global Health Action*. 2013; 6(6): 1-12.

菊池 良太 (研究発表)

小児臓器移植患者の保護者の Health-Related Quality of Life —養育の負担感とサポート資源に焦点を当てて—

9月3日

目 麻里子 (論文抄読)

Casado B, Sacco P. Correlates of caregiver burden among family caregivers of older Korean Americans. *The Journal of Gerontology, Series B, Psychological Sciences and Social Sciences*. 2011; 67(3): 331-336.

水越 真依 (論文抄読)

Rampel GR, Ravindran V, Rogers LG, Magill-Evans J. Parenting under pressure: a grounded theory of parenting young children with life-threatening congenital heart disease. *Journal of Advanced Nursing*. 2012; 69(3): 619-630.

松原 由季 (論文抄読)

D' Onise K, Lynch JW, McDermott RA, Esterman A. The beneficial effects of preschool attendance on adult cardiovascular disease risk. *Australian and New Zealand Journal of Public Health*. 2011; 35(3): 278-283.

江本 駿 (論文抄読)

Zordan RD, Juraskova I, Butow PN, Jolan A, Kirsten L, Chapman J, et al. Exploring the impact of training in the experience of Australian support group leaders: current practices and implications for research. *Health Expectations*. 2010; 13: 427-440.

9月17日

瀬戸山 有美 (論文抄読)

Kurth E, Kennedy HP, Stutz EZ, Kesselring A, Fornaro I, Spichiger E. Responding to a crying infant - you do not learn it overnight: a phenomenological study. *Midwifery*. 2014; 30(6): 742-749.

岡部 花枝 (論文抄読)

Baiocchi-Wagner EA, Talley AE. The role of family communication in individual health attitudes and behaviors concerning diet and physical activity. *Health Communication*. 2013; 28: 193-205.

藤岡 寛 (研究発表)

Empowerment of families rearing children with severe motor and intellectual disabilities.

9月24日

菊池 良太 (論文抄読)

Williams L, Eilers J, Heermann J, Smith K. The lived experience of parents and guardians providing care for child transplant recipients. *Progress in Transplantation*. 2012; 22(4): 393-402.

高梨 志帆 (論文抄読)

Carlsson G, Moller A, Blomstrand C. Managing an everyday life of uncertainty - a qualitative study of coping in persons with mild stroke. *Disability and Rehabilitation*. 2009; 31(10): 773-782.

瀬戸山 有美 (研究発表)

The appraisal and coping process for baby crying in first time mothers.

10月1日

丸山 暁子 (論文抄読)

Chenni N, Lacroze V, Pouel C, Fraisse A, Kreitmann B, Gamberre M, et al. Fetal heart disease and interruption of pregnancy: factors influencing the parental decision-making process. *Parental Diagnosis*. 2012; 32: 168-172.

藤田 彩子 (論文抄読)

Hult JR, Wrubel J, Branstrom R, Acree M, Moskowitz T. Disclosure and nondisclosure among people newly diagnosed with HIV: an analysis from a stress and coping perspective. *AIDS Patient Care and STDs*. 2012; 26(3): 181-190.

副島 堯史 (研究発表)

Work status, job performance, and job satisfaction in adult survivors of childhood cancer.

10月8日

松原 由季 (論文抄読)

Park H, Walton-Moss B. Parenting style, parenting stress, and children's health-related behaviors. *Journal of Developmental and Behavioral Pediatrics*. 2012; 33(6): 495-503.

副島 堯史 (論文抄読)

Chan F, Strauser D, da Silva Cardoso E, Xi Zheng L, Chan JYC, Feuerstein M. State vocational services and employment in cancer survivors. *Journal of Cancer Survivorship*. 2008; 2(3): 169-178.

森下 美紀 (研究発表)

Quality of life and satisfaction with care among family members of patients with terminal digestive cancer hospitalized in a general ward.

10月15日

李 孝媛 (論文抄読)

Ram PK, Halder AK, Granger SP, Jones T, Hall P, Hitchcock D, et al. Is structured observation a valid technique to measure handwashing behavior? Use of acceleration sensors embedded in soap to assess reactivity to structured observation. *The American Society of Tropical Medicine and Hygiene*. 2010; 83(5): 1070-1076.

丸山 暁子 (論文抄読)

Rempel GR, Cender LM, Lynam MJ, Sandor GG, Farquharson D. Parent's perspectives on decision making after antenatal diagnosis of congenital heart disease. *Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing*. 2004; 33: 64-70.

大塚 寛子 (研究発表)

Development and evaluation of childhood immunization education programs for parents in the perinatal period. 一周産期における親向けの乳幼児予防接種教育に関するプログラムの作成と評価—

11月19日

大塚 寛子 (論文抄読)

Saitoh A, Nagata S, Saitoh A, Tsukahara Y, Vaida F, Sonobe T, et al. Perinatal immunization education improves immunization rates and knowledge: a randomized controlled trial. *Preventive Medicine*. 2013; 56:398-405.

江本 駿 (論文抄読)

Henderson SL, Packman W, Packman S. Psychosocial aspect of patients with Niemann-Pick disease, type B. *American Journal of Medical Genetics, Part A*. 2009; 149A: 2430-2436.

李 孝媛 (論文抄読)

Hakim M, Tofail F, Khalil MI. Association between child diarrhea and maternal depression. *Journal of Shaheed Suhrawardy Medical College*. 2013; 5(1): 14-20.

11月26日

高梨 志帆 (論文抄読)

Hammond FM, Davis CS, Cook JR, Philbrick P, Hirsch MA. Relational dimension of irritability following traumatic brain injury: a qualitative analysis. *Brain Injury*. 2012; 26(11): 1287-1296.

森下 美紀 (論文抄読)

Hannon B, Swami N, Krzyzanowska MK, Leighl N, Rodin G, Le LW, et al. Satisfaction with oncology care among patients with advanced cancer and their caregivers. *Quality of Life Research*. 2013; 22(9): 2341-2349.

吉備 智史 (研究発表)

日本における小児に対する「いのちの教育」の実践に関する研究

12月3日

目 麻里子 (研究発表)

中年期女性有職者における family-to-work spillover の関連要因の検討—介護役割に焦点を当てて—

岡部 花枝 (研究発表)

中規模事業所に勤務する中年期男性の運動に関連する要因の検討—労働者のエフィカシーと配偶者からのサポートに着目して—

12月10日

水越 真依 (研究発表)

精神疾患を有する初産婦の周産期における夫の体験

菊池 良太 (研究発表)

小児臓器移植患者を養育する保護者の health-related quality of life

12月17日

修士論文進捗報告

12月24日

修士論文進捗報告

1月7日

修士論文進捗報告

1月14日

修士論文発表会準備

1月21日

修士論文発表会準備

1月28日

吉備 智史 (研究発表)

日本における小児に対する「いのちの教育」の実践に関する研究



森下 美紀

終末期消化器がん患者の家族における QOL に関する研究—満足度を向上するケアのエビデンス確立を目指して—

2月18日

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患と胎児診断された妊婦の情報取得に関する意思決定支援の検討

高梨 志帆 (研究発表)

TBI を受傷した親と子どもの関係の変化についての研究

2月25日

藤田 彩子 (論文抄読)

Mitchell M, Knowlton A. Stigma, disclosure, and depressive symptoms among informal caregivers of people living with HIV/AIDS. *AIDS Patient Care and STDs*. 2009; 23(8): 611-617.

江本 駿 (論文抄読)

Joachim G, Acorn S. Life with a rare chronic disease: the scleroderma experience. *Journal of Advanced Nursing*. 2003; 42(6): 598-606.

李 孝媛 (研究発表)

フィリピンにおける子供の手洗い行動に関連する家族要因

3月4日

丸山 暁子 (論文抄読)

Ruschel P, Zielinsky P, Grings C, Pimentel J, Azevedo L, Paniagua R. Maternal-fetal attachment and prenatal diagnosis of heart disease. *European Journal of Obstetrics & Gynecology and Reproductive Biology*. 2014; 174: 70-75.

瀬戸山 有美 (論文抄読)

Wallander JL, Varni JW. Social support and adjustment in chronically ill and handicapped children. *American Journal of Community Psychology*. 1989; 17(2): 185-201.

松原 由季 (研究発表)

長期入院を経験した慢性疾患を持つ用事が集団生活に入るときに抱える心理社会的困難についての研究

3月11日

高梨 志帆 (論文抄読)

Kristensen RK, Teasdale TW. Parental stress and marital relationships among patients with brain injury and their spouses. *NeuroRehabilitation*. 2011; 28: 321-330.

副島 堯史 (論文抄読)

Howard AF, Bibiana JT, Smillie K, Goddard K, Pritchard S, Olson R, et al. Trajectories of social isolation in adult survivors of childhood cancer. *Journal of Cancer Survivorship*. 2013; 8(1): 80-93.

江本 駿 (研究発表)

希少難治性疾患患者の抱える生活史上の困難に関する研究—問題の所在と方法—

3月18日

李 孝媛 (論文抄読)

Zimet GD, Perkins SM, Sturm LA, Bair RM, Juliar BE, Mays RM. Predictors of STI vaccine acceptability among parents and their adolescent children. *Journal of Adolescent Health*. 2005; 37: 179-186.

松原 由季 (論文抄読)

Wakimizu R, Kamagata S, Kuwabara T, Kamibeppu K. A randomized controlled trial of an at-home preparation programme for Japanese preschool children: effects on children's and caregivers' anxiety associated with surgery. *Journal of Evaluation in Clinical Practice*. 2009; 15: 393-401.

藤田 彩子 (研究発表)

中年期以降の HIV 陽性者における介護場所と介護者についての意向調査

平成 26 年度

4月8日

松原 由季 (論文抄読)

Meijer SA, Sinnema G, Bijstra JO, Melenbergh GJ, Wolters WHG. Social functioning in children with a chronic illness. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*. 2000; 41(3): 309-317.

副島 堯史 (レクチャー)

東京大学家族看護学教室における研究の歩み

大塚 寛子 (研究発表)

周産期における親向けの乳幼児予防接種教育プログラムに関する研究

4月15日

江本 駿 (論文抄読)

Griffith GM, Hastings RP, Nash S, Petalas M, Oliver C, Howlin P, et al. "You have to sit and explain it all, and explain yourself." Mother's experiences of support services for their offspring with a rare genetic intellectual disability syndrome. *Journal of Genetic Counseling*. 2011; 20:165-177.

目 麻里子 (レクチャー)

論文について

菊池 良太 (レクチャー)

文献検索とレビュー

森下 美紀 (研究発表)

Quality of life and satisfaction with care among family members of patients with terminal digestive cancer hospitalized in a general ward.

4月22日

李 孝媛 (論文抄読)

Hindin MJ. Family dynamics, gender differences and educational attainment in Filipino adolescents. *Journal of Adolescence*. 2005; 28: 299-316.

水越 真依 (レクチャー)

研究倫理

副島 堯史 (研究発表)

Job performance and its related factors among adult survivors of childhood cancer.

5月13日

丸山 暁子 (論文抄読)

Jordan B, Franich-Ray C, Albert N, Anderson V, Northam E, Cochrane A, et al. Early mother-infant relationships after cardiac surgery in infancy. *Archives of disease in childhood*. 2014; 99(7): 641-645

瀬戸山 有美 (レクチャー)

研究とは

瀬戸山 有美 (研究発表)

保育園勤務看護職の職業専門性に関する研究

5月20日

藤田 彩子 (論文抄読)

Robison J, Shugrue N, Fortinsky RH, Gruman C. Long-term supports and services planning for the future: implications from a statewide survey of baby boomers and older adults. *The Gerontologist*. 2014; 54(2): 297-313.

高梨 志帆 (論文抄読)

Carnes SL, Quinn WH. Family adaptation to brain injury: coping and psychological distress. *Families, Systems, & Health*. 2005; 23(2): 186-203.

江本 駿 (研究発表)

希少疾患患者の抱える不確かさとその対処行動・適応に関する研究

5月27日

今井 紗緒 (論文抄読)

Shafiei T, Small R, McLachlan H. Women's views and experiences of maternity care: a study of immigrant Afghan women in Melbourne, Australia. *Midwifery*. 2012; 28: 198-203.

中嶋 祥平 (論文抄読)

Jobe-Shields L, Alderfer MA, Barrera M, Vannatta K, Currier JM, Phipps S. Parental depression and family environment predict distress in children before Stem Cell Transplantation. *Journal of Developmental & Behavioral Pediatrics*. 2009; 30: 140-146.

松原 由季 (研究発表)

保育所における慢性疾患児に対する支援と母親の育児ストレスとの関連

6月3日

大城 怜 (論文抄読)

Kang J, Shin DW, Choi JE, Sanjo M, Yoon SJ, Kim HK, et al. Factors associated with positive consequences of serving as a family caregiver for a terminal cancer patient. *Journal of Psycho-Oncology*. 2013; 22: 564-571.

鈴木 征吾 (論文抄読)

Dillenburg K, McKerr L. 'How long are we able to go on?' Issues faced by older family caregivers of adults with disabilities. *British Journal of Learning Disabilities*. 2010; 39: 29-38.

李 孝媛 (研究発表)

フィリピンにおける子どもの手洗い行動に関連する家族要因

6月10日

福井 千絵 (論文抄読)

Livingston G, Leavey G, Manela M, Livingston D, Rait G, Sampson E, et al. Making decisions for people with dementia who lack capacity: qualitative study of family carers in UK. *BMJ*. 2010; 341: c4184.

中村 真由美 (論文抄読)

Eagleson KJ, Justo RN, Ware RS, Johnson SG, Boyle FM. Health-related quality of life and congenital heart disease in Australia. *Journal of Pediatrics and Child Health*. 2013; 49: 856-864.

高梨 志帆 (研究発表)

母親と子どもが行う、高次脳機能障害を持つ父親に関するコミュニケーション—関連要因の探索—

6月24日

小石澤 素子 (論文抄読)

Berge JM, Loth K, Hanson C, Croll-Lampert J, Neumark-Sztainer D. Family life cycle transitions and the onset of eating disorders: a retrospective grounded theory approach. *Journal of Clinical Nursing*. 2011; 21: 1355-1363.

今井 紗緒 (研究発表)

在日外国人の母子保健

藤田 彩子 (研究発表)

中年期以降の HIV 陽性者の介護場所と介護者に関する意向についての実態調査

7月1日

小石澤 素子 (研究発表)

思春期における神経性食欲不振症を抱える患者とその家族背景に関する研究

中村 真由美 (研究発表)

先天性心疾患患者と家族のかかわりに関する研究

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患の出生前診断を受けた子どもに対する母親の気持ち—妊娠中から産後にかけての継時的な変化とその契機—

7月8日

福井 千絵 (研究発表)

研究課題の探究 (認知症)

中嶋 祥平 (研究発表)

研究発表 (造血幹細胞移植)

菊池 良太 (研究発表)

Study Plan for Doctoral Dissertation

7月15日

水越 真依 (研究発表)

周産期メンタルヘルスと夫婦間コミュニケーションに焦点を当てた産前指導に関する研究

目 麻里子 (研究発表)

認知症患者の介護者のワーク・ライフ・バランスの検討

7月22日

鈴木 征吾 (研究発表)

Clinical Question の発掘

大城 怜 (研究発表)

母親の乳がん診断・治療開始～終末期・死別後まで、周囲の家族への影響

藤田 彩子 (研究発表)

中年期以降の HIV 陽性者の介護場所と介護者についての意向とその関連要因

江本 駿 (研究発表)

希少疾患患者の抱える不確かさとその対処行動・適応に関する研究

7月29日

高梨 志帆 (研究発表)

母親と子どもが行う、高次脳機能障害を持つ父親に関するコミュニケーション—関連要因の探索—

松原 由季 (研究発表)

保育所における慢性疾患児に対する支援と母親の育児ストレスとの関連

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患の出生前診断を受けた子どもに対する母親の気持ち—妊娠中から産後にかけての継時的な変化とその契機—

8月26日

小石澤 素子 (論文抄読)

Lock J, Le Grange D, Agras WS, Moye A, Bryson SW, Jo B. Randomized clinical trial comparing family-based treatment with adolescent-focused individual therapy for adolescents with anorexia nervosa. Archives of General Psychiatry. 2010; 67(10): 1025-1032.

福井 千絵 (論文抄読)

Schulz R, Mendelsohn AB, Haley WE, Mahoney D, Allen RS, Zhang S, et al. End-of-life care and the effects of bereavement on family caregivers of persons with dementia. *The New England Journal of Medicine*. 2003; 349(20): 1936-1942.

森下 美紀 (研究発表)

Quality of life and satisfaction with care among family caregivers of patients with terminal digestive cancer hospitalized in a general ward.

9月2日

江本 駿 (論文抄読)

Kerr AM, Haas SM. Parental uncertainty in illness: managing uncertainty surrounding an "orphan" illness. *Journal of Pediatric Nursing*. 2014; 29(5): 393-400.

松原 由季 (論文抄読)

Cousino MK, Hazen RA. Parenting stress among caregivers of children with chronic illness: a systematic review. *Journal of Pediatric Psychology*. 2013; 38(8): 809-828.

末次 美子 (研究発表)

早産児の母親の出産体験の認知とボンディング形成に関する研究

9月30日

藤田 彩子 (論文抄読)

Brotman S, Ryan B, Cormier R. The health and social service needs of gay and lesbian elders and their families in Canada. *Gerontologist*. 2003; 43(2): 192-202.

大塚 寛子 (研究発表)

妊娠期からの親向けの乳幼児予防接種教育プログラムを用いた介入研究

10月7日

高梨 志帆 (論文抄読)

Bachner YG, Carmel S. Open communication between caregivers and terminally ill cancer patients: the role of caregivers' characteristics and situational variables. *Journal of Health Communication*. 2009; 24(6): 524-531.

丸山 暁子 (論文抄読)

Bruce E, Lilja C, Sundin K. Mothers' lived experiences of support when living with young children with congenital heart defects. *Journal for Specialists in Pediatric Nursing*. 2014; 19(1): 54-67.

李 孝媛 (論文抄読)

Vindigni SM, Riley PL, Jung M. Systematic review: handwashing behaviour in low- to middle-income countries: outcome measures and behaviour maintenance. *Tropical Medicine and International Health*. 2011; 16(4): 466-477.

瀬戸山 有美 (研究発表)

Development of a criteria tool for when accidents occur in the child day care centers.

10月14日

中村 真由美 (論文抄読)

Yang HL, Chen YC, Wang JK, Gau BS, Moons P. An evaluation of disease knowledge in dyads of parents and their adolescent children with congenital heart disease. *Journal of Cardiovascular Nursing*. 2013; 28(6): 541-549.

鈴木 征吾 (論文抄読)

Farmer JE, Clark MJ, Sherman A, Marien WE, Selva TJ. Comprehensive primary care for children with special health care needs in rural areas. *Pediatrics*. 2005; 116(3): 649-656.

中嶋 祥平 (論文抄読)

Feichtl RE, Rosenfeld B, Tallamy B, Cairo MS, Sands SA. Concordance of quality of life assessments following pediatric hematopoietic stem cell transplantation. *Psycho-oncology*. 2010; 19(7): 710-717.

大城 怜 (論文抄読)

Van Humbeeck L, Piers RD, Van Camp S, Dillen L, Verhaeghe ST, Van Den Noortgate NJ. Aged parents' experiences during a critical illness trajectory and after the death of an adult child: a review of the literature. *Journal of Palliative Medicine*. 2013; 27(7): 583-95.

10月28日

小石澤 素子 (論文抄読)

Elizabeth H. Blodgett Salafia, Mallery K. Schaefer, Emily C. Haugen. Connections between marital conflict and adolescent girls' disordered eating: parent-adolescent relationship quality as a mediator. *Journal of Child and Family Studies*. 2014; 23(6): 1128-1138.

福井 千絵 (論文抄読)

van der Steen JT, Deliens L, Ribbe MW, Onwuteaka-Philipsen BD. Selection bias in family reports on end of life with dementia in nursing homes. *Journal of Palliative Medicine*. 2012; 15(12): 1292-1296.

副島 堯史 (研究発表)

Job Performance and its related factors among adult survivors of childhood cancer.



11月18日

今井 紗緒 (論文抄読)

Bornstein MH, Cote LR. "Who is sitting across from me?" Immigrant mothers' knowledge of parenting and children's development. *Pediatrics*. 2004; 114(5): 557-564.

鈴木 征吾 (論文抄読)

Wilson LS, Moskowitz JT, Acree M, Heyman MB, Harmatz P, Ferrando SJ, et al. The economic burden of home care for children with HIV and other chronic illnesses. *American Journal of Public Health*. 2005; 95(8): 1445-1452.

大城 怜 (論文抄読)

Gilbar O. Parent caregiver adjustment to cancer of an adult child. *Journal of Psychosomatic Research*. 2002; 52(5): 295-302.

中村 真由美 (論文抄読)

Freitas IR, Castro M, Sarmento SL, Moura C, Viana V, Areias JC, et al. A cohort study on psychosocial adjustment and psychopathology in adolescents and young adults with congenital heart disease. *BMJ Open*. 2013; 3(1).

11月25日

松原 由季 (研究発表)

看護職配置保育所に通園する慢性疾患時の母親における育児ストレスと保育所から受ける支援との関連の検討

高梨 志帆 (研究発表)

高次脳機能障害になった父親に関して、母親と子どもが行うオープンなコミュニケーションに関連する要因の探索

12月2日

江本 駿 (研究発表)

稀少な免疫疾患を有する患者が診断後に抱える不確かさの体験に関する質的研究

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患の出生前診断を受けた子どもに対する母親の気持ち—妊娠中から産後にかけての経時的な変容とその契機—

12月9日

李 孝媛 (研究発表)

フィリピンにおける小学生の手洗い行動に関連する家族要因

江本 駿 (研究発表)

稀少な免疫疾患を有する患者が診断後に抱える不確かさの体験に関する質的研究

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患の出生前診断を受けた子どもに対する母親の気持ち—妊娠中から産後にかけての経時的な変容とその契機—

松原 由季 (研究発表)

看護職配置保育所に通園する慢性疾患時の母親における育児ストレスと保育所から受ける支援との関連の検討

高梨 志帆 (研究発表)

高次脳機能障害になった父親に関して、母親と子どもが行うオープンなコミュニケーションに関連する要因の探索

1月6日

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患の診断を出生前に受けた子どもに関する母親の時間的展望—「普通」という意味の経時的な変容とその契機—

藤田 彩子 (研究発表)

中年期以降の男性 HIV 陽性者における要介護状態を想定したときの介護場所についての意向とその関連要因

李 孝媛 (研究発表)

フィリピンにおける小学生の手洗い行動に関連する家族要因

江本 駿 (研究発表)

稀少な免疫疾患を有する患者が診断後に抱える「不確かさ」の内容とその経過に関する質的研究

松原 由季 (研究発表)

看護職配置保育所に通園する慢性疾患時の母親における育児ストレスと保育所から受ける支援との関連の検討

高梨 志帆 (研究発表)

高次脳機能障害になった父親に関して、母親と子どもが行うオープンなコミュニケーションに関連する要因の探索

1月20日

丸山 暁子 (研究発表)

先天性心疾患の診断を出生前に受けた子どもに関する母親の時間的展望—「普通」という意味の経時的な変容とその契機—

藤田 彩子 (研究発表)

中年期以降の男性 HIV 陽性者における要介護状態を想定したときの介護場所についての意向とその関連要因

李 孝媛 (研究発表)

フィリピンにおける小学生の手洗い行動に関連する家族要因

江本 駿 (研究発表)

稀少な免疫疾患を有する患者が診断後に抱える「不確かさ」の内容とその経過に関する質的研究

松原 由季 (研究発表)

看護職配置保育所に通園する慢性疾患時の母親における育児ストレスと保育所から受ける支援との関連の検討

高梨 志帆 (研究発表)

高次脳機能障害になった父親に関して、母親と子どもが行うオープンなコミュニケーションに関連する要因の探索

1月27日

中嶋 祥平 (研究発表)

前向き縦断的調査による小児造血幹細胞移植の急性期における母親と父親の心理的問題に関する予測因子の探索

2月3日

今井 紗緒 (研究発表)

在日外国人母親の産後うつとその関連要因—ソーシャルサポートに焦点を当てて—

目 麻里子 (研究発表)

The mediator of the causal relationship between care burden and work-family spillover among the working carers for dementia patients: focusing on social services use.

2月17日

福井 千絵 (研究発表)

特別養護老人ホームにおける認知症をもつ人の終末期において医療介入をするか否かの決定に関連する要因の探索

水越 真依 (研究発表)

初めて親になる夫婦の関係焦点型コーピングに関する縦断研究

菊池 亮太 (研究発表)

Impact of self-disclosure about transplant and self-esteem on health-related quality of life and medication adherence among adolescent transplant recipients.

2月24日

瀬戸山 有美 (研究発表)

A study on the effect and use of The Sick Child Care Project

大城 怜 (研究発表)

周手術期の乳がん患者の親における心理的苦痛・ストレスに影響を及ぼす要因の探索

副島 堯史 (研究発表)

Work Performance and its related factors among adult survivors of childhood cancer.

3月3日

中嶋 祥平 (論文抄読)

Clarke NE, McCarthy MC, Downie P, Ashley DM, Anderson VA. Gender differences in the psychosocial experience of parents of children with cancer: a review of the literature. *Psycho-Oncology*. 2009; 18(9): 907-915.

今井 紗緒 (論文抄読)

Ahmed A, Stewart DE, Teng L, Wahoush O, Gagnon AJ. Experiences of immigrant new mothers with symptoms of depression. *Archives of Women's Mental Health*. 2008; 11(4): 245-303.

小石澤 素子 (研究発表)

神経性やせ症をもつ思春期女子の親が家族会に所属することでもたらされる親子関係への影響

3月10日

鈴木 征吾 (研究発表)

医療ケアを要する重症心身障害児を在宅で養育する両親の養育肯定感に関連する要因

伊藤 美千代 (研究発表)

再発を繰り返しながらも「働きたい」と思っているクローン病のある人の発症後の人生における「働く」の再構築に関する質的研究

3月17日

中村 真由美 (研究発表)

先天性心疾患患者のリプロダクティブヘルスに関する質的研究～思春期女性が恋愛・結婚・妊娠・出産について抱く思い～

武者 貴美子 (研究発表)

母親による乳幼児虐待予防に向けた育児支援

#### 4. 家族看護学教室研究会

##### 4-1. 家族看護学研究会（講師敬称略）

第62回 2013年4月19日

相場 繁

（NPO 法人日本臨床研究支援ユニット 福島県被災者支援プロジェクト いわき市担当）

「福島県いわき市における被災者支援活動」

第63回 2013年5月24日

清水 準一

（首都大学東京大学院人間健康科学研究科看護科学域 健康福祉学部看護学科 准教授）

「生体肝移植ドナーの家族内状況と今後の支援上の課題」

第64回 2013年6月28日

飛鳥井 望（公益財団法人 東京都医学総合研究所 副所長）

「外傷的死別による悲嘆の理解とケア」

第65回 2013年10月25日

山本 弘江（名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻 助教）

「育児期に心の病を発症した母親と家族の課題と支援」

第66回 2014年4月25日

小林 京子（自治医科大学看護学部 講師）

「米国留学から得るもの」

第 67 回 2014 年 5 月 30 日

岩崎 美和（東京大学医学部附属病院 小児看護専門看護師）

「こどもと家族の安全・安心な医療・看護を提供するために—附属病院における  
“こども支援担当”の活動—」

第 68 回 2014 年 9 月 26 日

上野 里絵（東京医科大学医学部看護学科精神看護学領域 准教授）

「精神疾患を有する親と子どもへの支援」

第 69 回 2014 年 12 月 19 日

福澤 利江子（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 助教）

「周産期ケアの国際比較研究」

#### 4-2. 家族ケア症例研究会

第42回 2013年9月6日

木多 美晴（東京大学医学部附属病院外来主任副看護師長）

うつ病を合併した不安の高い妊婦への支援

第43回 2013年11月22日

松原 由季（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

看護チームの情報共有の工夫が母親からの信頼を促進した、神経疾患をもつ児の事例

第44回 2013年12月20日

小石澤 素子（慶應義塾大学病院）

母子関係性改善への支援 ―食事への介入を通じて―

第45回 2014年2月21日

中嶋 祥平（東京大学医学部附属病院）

発達の遅れのある子どもへの骨髄移植に伴う家族支援について

第46回 2014年7月4日

鈴木 征吾（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

救命蘇生後に集中治療室に搬送された新生児の家族との関わり

第47回 2014年7月25日

田中 一未（聖路加国際病院 緩和ケア病棟）

終末期がんの母親の療養環境や子どもの面会を巡る家族の思い

第48回 2014年10月17日

大城 怜（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

成人がん患者とその母親を中心とした家族

―家族についての情報をどこまで把握すべきか―

第49回 2014年11月21日

中村 真由美（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程）

多くの医療的ケアが必要となった児とその家族への看護

—それぞれの意見を持つ両親が協力関係を築くためのかかわり—

第50回 2015年2月20日

高橋 有紀・町田 亜子（東京大学医科学研究所附属病院）

肺炎治療中に見当識と記憶の障害を併発した高齢患者への退院に向けた看護

—生活や家族の状況を把握することが困難なもとでの支援—



## 5. 院生自主勉強会

### M1 看護研究勉強会

#### 【目的】

- (1) 修士論文の計画立案・実施を前に、看護研究について基礎的知識を学ぶ
- (2) 看護研究についての理解や疑問を共有しディスカッションすることで学びを深める

#### 【内容】

D. F. ポーリット, C. T. ベック著: 近藤潤子監訳『看護研究: 原理と方法』(第2版)を各章(節)ごとに輪読する。

#### 【参加者】

李 孝媛、江本 駿、高梨 志帆、藤田 彩子、松原 由季、丸山 暁子

#### 【日程】

第1回 2013年8月2日

- 第1章 看護研究への誘い(松原 由季)
- 第2章 質的研究と量的研究における重要な概念と用語(高梨 志帆)
- 第3章 質的研究と量的研究における研究プロセスの概観(藤田 彩子)

第2回 2013年8月13日

- 第4章 研究問題、研究設問と仮説(丸山 暁子)
- 第5章 文献レビュー(藤田 彩子)
- 第6章 概念的文脈の開発(江本 駿)

第3回 2013年8月20日

- 第7章 倫理的研究のデザイン(丸山 暁子)
- 第8章 量的研究のデザイン(高梨 志帆)
- 第9章 量的研究における厳密性の強化(藤田 彩子)

第4回 2013年8月27日

- 第10章 さまざまな目的に応じた量的研究(江本 駿)
- 第11章 質的研究のデザインと方法(藤田 彩子)
- 第12章 質的デザインと量的デザインの統合(松原 由季)

第5回 2013年9月3日

- 第13章 標本抽出のデザイン(高梨 志帆)
- 第14章 データ収集計画のデザインと実施(丸山 暁子)

第6回 2013年9月10日

- 第15章 自己報告データの収集(藤田 彩子)

- 第 16 章 観察データの収集 (松原 由季)
- 第 17 章 生物生理学的データ、その他のデータの収集法
- 第 18 章 データの質の評価 (江本 駿)
- 第 7 回 2013 年 9 月 17 日
  - 第 19 章 量的データの分析：記述統計 (全員)
- 第 8 回 2013 年 9 月 24 日
  - 第 20 章 量的データの分析：推測統計 (丸山 暁子)
- 第 9 回 2013 年 10 月 1 日
  - 第 20 章 量的データの分析：推測統計
    - 2 群の母平均の差の検定 (江本 駿)
    - 割合の差の検定 (丸山 暁子)
    - 一元配置分散分析、多重比較 (高梨 志帆)
    - 二元配置分散分析 (藤田 彩子)
    - 検出力分析 (松原 由季)
- 第 10 回 2013 年 10 月 8 日
  - 第 21 章 量的データの分析：多変量統計学
    - 単回帰分析 (江本 駿)
    - 重回帰分析 (松原 由季)
- 第 11 回 2013 年 10 月 15 日
  - 第 21 章 量的データの分析：多変量統計学
    - ロジスティック回帰分析 (松原 由季)
    - SPSS による分散分析 (藤田 彩子)
- 第 12 回 2013 年 10 月 22 日
  - 第 21 章 量的データの分析：多変量統計学
    - 共分散分析 (丸山 暁子)
    - 因子分析 (高梨 志帆)
- 第 13 回 2013 年 10 月 29 日
  - 第 21 章 量的データの分析：多変量統計学
    - パス解析 (藤田 彩子)

## M2 カンファレンス

### 【目的】

- (1) 互いの研究計画のクリティークを通して、質の高い研究計画の遂行に資する
- (2) クリティークとディスカッションの技術を身に付ける

### 【内容】

- (1) 各自の研究計画について発表し、ディスカッションを行う
- (2) 現在困っていることなどを相談し、アイデアを出し合う

### 【参加者】

岡部 花枝、菊池 良太、櫻井 美里、目 麻里子、水越 真依

### 【日程】

第1回 2013年4月4日

菊池 良太（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「小児臓器移植患者の親の Health-Related Quality of Life」

第2回 2013年4月12日

岡部 花枝（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「中年期既婚男性労働者とその配偶者における運動の自己効力感と身体活動・運動の関連に焦点をあてて」

第3回 2013年4月18日

目 麻里子（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「女性有職者における介護認知がファミリー・ワーク・スピルオーバーに及ぼす影響」

第4回 2013年4月25日

水越 真依（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「気分障害を持つ妻とともに初めて育児に臨む夫の育児開始時期の体験」

第5回 2013年5月8日

櫻井 美里（東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 修士課程2年）

「NICU・GCU に児が入院中で母子分離状態にある母親の支援に対する行政保健師の認識と支援の実態」

第6回 2013年5月16日

目 麻里子（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「女性有職者における介護認知がファミリー・ワーク・スピルオーバーに及ぼす影響」

第7回 2013年5月30日

岡部 花枝（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「中年期既婚男性労働者とその配偶者における運動の自己効力感と身体活動・運動の関連に焦点をあてて」

第8回 2013年6月6日

櫻井 美里（東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 修士課程2年）

「NICU・GCUに児が入院中で母子分離状態にある母親の支援に対する行政保健師の認識と支援の実態」

第9回 2013年6月13日

水越 真依（東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野 修士課程2年）

「気分障害を持つ妻とともに初めて育児に臨む夫の育児開始時期の体験」

## M1 看護研究勉強会

### 【目的】

- (1) 看護研究についての理解や疑問を共有し、討議することで学びを深める
- (2) 修士論文の研究計画を作成するにあたって、研究方法について基礎的知識を学ぶ

### 【内容】

- (1) 各自の研究計画について発表と意見交換
- (2) 研究方法についての知識整理と研究方法に着目した文献の批評

### 【参加者】

今井 紗緒、大城 怜、小石澤 素子、鈴木 征吾、中嶋 祥平、中村 真由美、福井 千絵

### 【日程】

第1回 2014年6月6日

文献クリティークとインパクトファクター (福井 千絵)

第2回 2014年6月10日

「在日外国人の母子保健に関する研究」(今井 紗緒)

第3回 2014年6月13日

「造血幹細胞移植を受ける子どもに関する研究」(中嶋 祥平)

第4回 2014年6月17日

「母親の乳がん診断・治療開始～終末期・死別後まで、周囲の家族への影響」  
(大城 怜)

第5回 2014年6月24日

「認知症終末期にある人の家族介護者に関する研究」(福井 千絵)

第6回 2014年7月1日

「思春期における神経性食欲不振症を抱える患者とその家族背景に関する研究」  
(小石澤 素子)

第7回 2014年7月8日

「先天性心疾患患者と家族のかかわりに関する研究」(中村 真由美)

第8回 2014年7月11日

「医療的ケアを必要とする障害のある子どもと家族の在宅療養に関する研究」  
(鈴木 征吾)

第9回 2014年8月1日

量的研究方法：データの種類、比較、相関と回帰 (中嶋 祥平)

第10回 2014年9月8日

量的研究方法：重回帰分析 (中嶋 祥平)

第11回 2014年9月9日

システマティックレビュー (福井 千絵)

第12回 2014年9月26日

質的研究方法: 質的研究の特徴とデータ収集法の種類 (中村 真由美、小石澤 素子)

## 6. 教育活動（担当講義・実習）

### 平成 25 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

#### 【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
生きることを支える科学：看護学の最先端	総合科目一般 D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	前期	木	16：30～18：00
ひとを元気にする科学	全学自由研究ゼミ ナール	2	1・2	後期	木	不定期
健康総合科学概論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	水	10：30～12：00
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	木	8：40～12：00
小児看護学Ⅰ	看護学コース必修 選択	1	3	後期Ⅰ-2	月 金	8：40～12：00 16：40～18：10
家族看護学	看護学コース必修 選択	2	3	後期Ⅱ	金	13：00～16：20
小児看護学実習Ⅰ	看護学コース必修	1	3	後期Ⅲ	月～金	9：00～16：00
小児看護学Ⅱ	看護学コース必修	1	4	前期Ⅲ	火 木	8：40～18：10 10：30～16：20
小児看護学実習	看護学コース必修	2	4	後期	月～金	8：00～16：00

#### ※ 開講時期

前期Ⅰ	4月8日	～	5月31日	8週
前期Ⅱ	6月3日	～	7月19日	7週
前期Ⅲ	8月26日	～	10月11日	7週
後期Ⅰ	10月15日	～	11月29日	7週
後期Ⅱ	12月2日	～	1月31日	7週
後期Ⅲ	2月3日	～	3月7日	5週

#### 【大学院】

家族看護学特論Ⅰ 5月～7月

家族看護学特論Ⅱ 10月～1月

トランスレーショナルリサーチ看護学入門

7月22日～7月26日（医学集中実習）

平成 26 年度家族看護学教室担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期および時間		
生きることを支える科学：看護学の最先端	総合科目-D 人間・環境一般 教養課程選択	2	1・2	前期	木	16：30～18：00
ひとを元気にする科学	全学自由研究ゼミ ナール	2	1・2	後期	木	不定期
健康総合科学概論	必修	2	2	後期Ⅰ・Ⅱ	火	10：30～12：00
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	木	8：40～12：00
小児看護学Ⅰ	看護学コース必修 選択	1	3	後期Ⅰ-2	月 金	8：40～12：00 16：40～18：10
家族看護学	看護学コース必修 選択	2	3	後期Ⅱ	金	13：00～16：20
小児看護学実習Ⅰ	看護学コース必修	1	3	後期Ⅲ	月～金	9：00～16：00
小児看護学Ⅱ	看護学コース必修	1	4	前期Ⅲ	火 木	8：40～18：10 10：30～16：20
小児看護学実習Ⅱ	看護学コース必修	2	4	後期	月～金	8：00～16：00

※ 開講時期

前期Ⅰ	4月7日	～	5月30日	8週
前期Ⅱ	6月2日	～	7月18日	7週
前期Ⅲ	8月25日	～	10月10日	7週
後期Ⅰ	10月14日	～	12月5日	8週
後期Ⅱ	12月8日	～	2月6日	7週
後期Ⅲ	2月9日	～	3月13日	5週

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ 4月～7月

家族看護学特論Ⅱ 10月～1月

トランスレーショナルリサーチ看護学入門

7月14日～7月18日（医学集中実習）



## 7. 教室の沿革

- 1992.04.10 東京大学医学部保健学科は、学科名称を健康科学・看護学科に改称し、東京大学医学部健康科学・看護学科家族看護学講座が新設される。
- 1992.10.01 杉下知子氏が本講座の教授として発令される。
- 1993.05 石垣和子氏が本講座の助教授として発令される。
- 1997.03.31 石垣和子助教授が退官。
- 2002.04.01 上別府圭子氏が本教室の助教授として発令される。
- 2003.03.31 杉下知子教授が退官。
- 2003.04.01 上別府圭子助教授が教室主任を務める。
- 2010.04.01 職名変更により上別府圭子助教授が准教授となる。
- 2011.04.01 池田真理氏が本教室の助教として発令される。
- 2011.08.01 佐藤伊織氏が本教室の助教として発令される。
- 2012.04.12 上別府圭子准教授を代表として QOL 研究センターが開設される。
- 2012.12.01 上別府圭子准教授が本教室の教授として発令される。
- 2013.04.01 上別府圭子教授が健康科学・看護学専攻 専攻長（任期 2 年）として就任される。
- 福澤利江子氏が本教室の助教として発令される。
- 修士課程に 5 名（李孝媛，梅下かおり(休学)，江本駿，藤田彩子，丸山暁子）が入学，2 名（田鍋(高梨)志帆，松原由季）が復学。博士課程に 2 名（瀬戸山有美，副島堯史）が進学。
- 2013.05.25 平成 25 年度家族看護学分野スタッフ会議を開催。
- 2014.03.24～25 学部卒論生 1 名（吉備智史）が卒業，修士課程 4 名（岡部花枝，目麻里子，菊池良太，水越真依），博士課程 2 名（藤岡寛，桐谷麻美）が修了。
- 2014.03.31 池田真理助教が看護管理学分野に異動。
- 2014.04.01 修士課程に 5 名（今井紗緒，大城玲，鈴木征吾，中村真由美，福井千絵）が入学，2 名（小石澤素子，中嶋祥平）が復学。博士課程に 3 名（目麻里子，菊池良太，水越真依）が進学。
- 2014.06.27 平成 26 年度家族看護学分野スタッフ会議を開催。
- 2014.07.01 網谷・マリー・レイチェル氏が本教室の助教として発令される。
- 2014.11.05 上別府圭子教授の再任が医学部代議員会で承認される。
- 2015.03.24～25 修士課程 6 名（李孝媛，江本駿，高梨志帆，藤田彩子，松原由季，丸山暁子），博士課程 2 名（大塚寛子，森下美紀）が修了。
- 2015.03.31 福澤利江子助教が退任。

資料（卒論・修論・博論）

## 卒業論文内容要旨

論文題目：日本における小児に対する「いのちの教育」の実践に関する研究

指導教員：上別府 圭子 教授

池田 真理 助教

東京大学医学部健康総合科学科

平成 24 年度進学

氏名 吉備 智史

### 抄録

目的：日本においては子どもたちに対して、生や死について考えてもらう教育が様々な形で実施されている。本研究では子どもたちに生や死について考えてもらう教育の特徴を整理し、実態を明らかにすることを目的とした。方法：文献レビュー：医学中央雑誌 Web 版にて「いのちの教育/AL」「いのちの授業/AL」「いのちの教室/AL」「命の教育/AL」「命の授業/AL」「デスエデュケーション/AL」「死の教育/AL」「死の準備教育/AL」を検索ワードとして文献を検索し、2001 年以降で小児を対象とした原著論文を選別した。フレームを《呼称》、《背景》、《目的》、《実施場所》、《実施者職種》、《実施対象》、《内容・方法》と定め、文献からそれぞれに該当するデータを抽出した。《背景》、《目的》、《内容・方法》のデータはカテゴリ化を行った。分析はカテゴリごとに表を作成して行った。インタビュー調査：2013 年 12 月～2014 年 1 月に子どもたちに生や死について考えてもらう教育の研究者に対してインタビューを行った。

結果：対象となった文献は 11 件であった。《呼称》は、〈いのちの教育〉に《背景》と《目的》の全てのカテゴリが含まれた。《背景》では、〈性に関する社会問題〉、〈自身のいのちに関する社会問題〉、〈他者のいのちに関する社会問題〉と〈死の直接体験の減少〉、〈死の疑似体験の増加〉で特徴が異なっていた。《目的》は、性教育に関連したもの、いのちの大切さに言及したものなどが存在した。《実施場所》は〈学校〉が多く、次いで〈家庭〉が多かった。《実施者職種》は〈保護者〉や〈教師〉、〈看護師〉など 11 種類と多様であった。《実施対象》は〈小学生〉に対するものが最多であり、次いで〈中学生〉が多かった。《内容・方法》は、性教育や〈デスエデュケーション〉を特徴としたものが存在した。インタビュー調査は 4 名に対して行い、所要時間は平均 63 分だった。A 先生は「共有体験」をもつことが〈いのちの教育〉の《目的》であると述べた。B 先生は「親子の相互作用」そのものが〈デスエデュケーション〉たり得ると述べた。C 先生は性教育を通して「それぞれがみんなかけがえのないもの」というメッセージを伝えようとした。D 先生は絵本を通して子どもと「情緒的な関わり」を持てるように関わると述べた。

考察：《呼称》では、「いのち」という言葉が生や死を包含した広い概念であることがわかった。《背景》では、〈性に関する社会問題〉、〈自身のいのちに関する社会問題〉、〈他者のいのちに関する社会問題〉が同時に言及されており、これらに共通の要因が存在することが推察された。《目的》では、〈自身のいのちの大切さを知る〉、〈自他のいのちの大切さを知る〉、〈自尊心・自尊感情を育

てる)のいずれにも根底に〈自身のいのちの大切さを知る〉ことが存在していた。《実施場所》は、〈学校〉と〈家庭〉がそれぞれの役割をもって協働する重要性が示唆された。同様に《実施者職種》では、〈教師〉や〈保護者〉の役割が大きいといえる。《実施対象》は〈未就学児〉や〈小学生〉への関わりの重要性が示唆された。

結論：本研究では子どもたちに生や死について考えてもらう教育の実態を明らかにした。この教育は「いのち」という言葉の特徴を利用しながら、家庭と学校が協働して子どもたちが「自分が大切だ」と思えるような関わりをもつことで種々の社会問題に対応しようとしていることが分かった。

表1：文献別カテゴリー一覧

著者	《呼称》	《背景》	《目的》	《実施場所》	《実施者職種》	《実施対象》	《内容・方法》
岡本 貴佐江ら (2010)	《いのちの教育》	〈他者のいのちに関する社会問題〉	〈性に関する知識を理解する〉 〈性行動を選択できるようになる〉 〈いのちの繋がり・継承を理解する〉 〈自他のいのちの大切さを知る〉	〈学校〉	〈教師〉 〈助産師〉	〈中学生〉	〈性の知識・危険に関する講義〉 〈性に関する体験学習〉
三上 久美子 (2013)	《いのちの教育》 《生教育》	〈性に関する社会問題〉 〈他者のいのちに関する社会問題〉 〈自身のいのちに関する社会問題〉 〈その他〉	〈性に関する知識を理解する〉 〈性行動を選択できるようになる〉 〈自他のいのちの大切さを知る〉 〈自尊心・自尊感情を育てる〉	〈学校〉	〈助産師〉	〈中学生〉	〈性の知識・危険に関する講義〉 〈性に関する体験学習〉 〈性に関するグループワーク〉
林 和枝 (2011)	《いのちの教育》	〈その他〉	〈より良く生きることが出来る〉 〈自尊心・自尊感情を育てる〉 〈悲嘆・喪失に対処できる〉	〈家庭〉	〈保護者〉		
林 和枝 (2010a)	《いのちの教育》 《デステュケーション》	〈死の直接体験の減少〉 〈死の疑似体験の増加〉	〈自身のいのちの大切さを知る〉 〈自他のいのちの大切さを知る〉	〈家庭〉	〈保護者〉	〈未就学児〉 〈小学生〉 〈中学生〉	〈親子で話す〉
林 和枝 (2010b)	《いのちの教育》 《デステュケーション》	〈死の疑似体験の増加〉		〈家庭〉	〈保護者〉	〈未就学児〉 〈小学生〉 〈中学生〉	
堀内 真子ら (2007)	《いのちの教育》		〈性に関する知識を理解する〉 〈性に関する危険を理解する〉 〈いのちの繋がり・継承を理解する〉 〈自他のいのちの大切さを知る〉	〈学校〉	〈看護教員〉	〈小学生〉	〈性の知識・危険に関する講義〉 〈性に関する体験学習〉 〈性に関するグループワーク〉
光岡 穂子ら (2003)	《デステュケーション》 《生と死の教育》	〈死の直接体験の減少〉 〈死の疑似体験の増加〉	〈自身のいのちの大切さを知る〉 〈より良く生きることが出来る〉 〈悲嘆・喪失に対処できる〉	〈学校〉 〈家庭〉 〈保育施設〉	〈保護者〉 〈教師〉 〈保育士〉	〈未就学児〉 〈小学生〉	〈死にまつわる本の読み聞かせ〉
谷田 重徳ら (2006)	《生と死の教育》 《スピリチュアルエデュケーション》	〈性に関する社会問題〉 〈他者のいのちに関する社会問題〉 〈自身のいのちに関する社会問題〉	〈自尊心・自尊感情を育てる〉	〈学校〉	〈医師〉 〈看護師〉 〈福祉職〉	〈小学生〉 〈中学生〉 〈高校生〉	
増田 安代 (2006)	《命の教育》	〈性に関する社会問題〉 〈他者のいのちに関する社会問題〉 〈自身のいのちに関する社会問題〉	〈いのちの繋がり・継承を理解する〉 〈自身のいのちの大切さを知る〉 〈自他のいのちの大切さを知る〉	〈学校〉 〈地域〉	〈保護者〉 〈教師〉 〈地域住民〉 〈保健師〉 〈助産師〉	〈小学生〉	〈その他講義〉
加藤 千恵子ら (2010)	《命の教育》 《命の授業》		〈性に関する知識を理解する〉 〈いのちの繋がり・継承を理解する〉	〈学校〉	〈教師〉 〈看護教員〉	〈小学生〉	〈その他講義〉
大野 裕一ら (2008)	《命の授業》		〈自他のいのちの大切さを知る〉	〈学校〉	〈消防職員〉	〈中学生〉	〈BLS教育〉

注1：フレーム名は《》で表し、《背景》、《目的》、《内容・方法》のデータはカテゴリ化の結果を、《実施場所》、《実施対象》は事前に定義したものを、それ以外はデータそのものを便宜的にカテゴリと呼び、〈〉で示した。

注2：著者の年度の横のアルファベットは、それらが異なる文献であることを表している。

中規模事業所に勤務する中年期男性の運動に関連する要因の検討  
-労働者のセルフ・エフィカシーと配偶者からのソーシャルサポートに着目して-

Correlates of physical exercises among middle-aged male workers in medium-sized enterprises:  
Focusing on self-efficacy and social support from their spouses

41106007 岡部 花枝

Hanae Okabe

指導教員: 上別府 圭子 教授

Tutor: Prof. K. Kamibeppu

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,

Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

平成 22 年 4 月入学

Admission in April, 2010

目的: 中規模事業所に勤務する中年期男性の身体活動量の実態を把握し、既婚労働者の運動量について、配偶者の運動量や労働者のセルフ・エフィカシー、労働者が認識する配偶者からのソーシャルサポートとの関連を検討した。方法: 2013 年 8 月-10 月にかけて中規模事業所 14 事業所に勤務する 40-59 歳の男性 631 名を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。労働者が既婚の場合は配偶者にも回答を依頼した。身体活動量は国際標準化身体活動質問票(IPAQ)、セルフ・エフィカシーは運動セルフ・エフィカシー尺度および主観的健康管理能力スケール、ソーシャルサポートは運動ソーシャルサポート尺度を用いて評価した。階層的重回帰分析を用いて、既婚労働者の運動量に関連する要因を検討した。結果: 256 名から返送があり、そのうち 182 名(有効回答率 28.8%)が分析対象者となった。既婚者は 109 組、非婚者(未婚・離婚)は 73 名であった。身体活動量の推奨量を満たす者は既婚者 60 名(55.0%)、非婚者 47 名(64.4%)であり、運動量の推奨量を満たす者は既婚者 39 名(35.8%)、非婚者 15 名(20.5%)だった。重回帰分析の結果、既婚者の運動量には運動セルフ・エフィカシー( $\beta = .288, p = .005$ )、主観的健康管理能力( $\beta = .228, p = .025$ )が関連していた。運動ソーシャルサポートは運動セルフ・エフィカシーと主観的健康管理能力の投入により、関連がなくなった。結論: 既婚者・非婚者ともに十分な身体活動を実施している者は多かったが、十分な運動をしている者は少なかった。既婚者の運動量にはセルフ・エフィカシーが影響しており、ソーシャルサポートはセルフ・エフィカシーを通して関連していた。中規模事業所に勤務する中年期既婚男性の運動量増加には、労働者のセルフ・エフィカシーや配偶者からのソーシャルサポートを高める支援が有効と考えられた。

Key words: employment, exercise, middle aged, physical activity, spouse

Health-related quality of life in parents of pediatric organ transplant recipients  
小児臓器移植患者を養育する保護者の health-related quality of life

41126003 Ryota Kikuchi  
菊池 良太

Tutor: Prof. Kiyoko Kamibeppu  
指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,  
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo  
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 家族看護学分野

Admission in April 2012  
平成 24 年 4 月入学

**Purposes:** This study investigated health-related quality of life (HRQOL) in pediatric organ transplant recipients' parents and relationships between HRQOL and perceived burden of nurturing, family function, and social support. **Methods:** Self-report anonymous questionnaires and a survey of medical records were completed between September and December 2013. The SF-36v2, which evaluates physical, psychological, and social health, was used to measure HRQOL. **Results:** While values for physical and psychological health were higher than standard values (Cohen's  $d = 0.35$  and  $0.16$ , respectively), social health was lower ( $d = 0.19$ ). "Parental consultation unrelated to donation" and "Donor" (standardized partial regression coefficients:  $\beta = -0.50$  and  $-0.21$ , respectively) were associated with physical health. "Family function" and "Commuting time between home and primary follow-up hospital" ( $\beta = 0.59$  and  $-0.31$ ) were related to psychological health. "Total score for perceived burden of nurturing" ( $\beta = -0.28$ ) was related to social health. **Conclusion:** Regarding HRQOL in pediatric transplant recipients' parents, while physical and psychological health was favorable, social health was impaired. In clinical practice, interventions targeting parents' physical condition, facilitation of community and family understanding and support to share pediatric transplant recipients' nurturing, and establishment of emergency procedures including local hospitals are important for promoting parental HRQOL.

**Key words:** child rearing, organ transplantation, parents, pediatrics, quality of life

Correlates of family-to-work spillover among working middle-aged female caregivers in Japan  
介護役割を担う中年期女性有職者における Family-to-work spillover の関連要因の検討

41106014 Mariko Sakka

目 麻里子

Tutor: Prof. Kiyoko Kamibeppu

指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,  
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo  
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

Admission in April, 2010

平成 22 年 4 月 入学

**Objective:** To examine differences in family-to-work spillover between women who were caregivers for their parents and those who were not, and the relationship between family-to-work spillover and caregiving appraisal. **Methods:** A cross-sectional survey was conducted with middle-aged female workers (age  $\geq 40$  years) from four large companies. Negative and positive family-to-work spillover (FWNS and FWPS, respectively), and negative and positive caregiving appraisals (negative: “feelings of social restriction,” “distress in relationships with others”; positive: “fulfillment of caregiving roles,” “affection toward the care tasks”) were measured. Data from 386 non-caregivers and 82 caregivers were analyzed. Independent t-tests compared caregivers and non-caregivers, and hierarchical multiple regression was performed on caregivers. **Results:** FWNS was higher in caregivers than in non-caregivers, whereas FWPS was not. “Feelings of social restriction” ( $\beta = .260, p = .019$ ) and “affection toward the care tasks” ( $\beta = .393, p = .007$ ) were related to FWNS. The interaction between “fulfillment of caregiving roles” and “feelings of social restriction” was related to FWNS, with “fulfillment of caregiving roles” moderating the effect of “feelings of social restriction” on FWNS ( $\beta = -.292, p = .050$ ). The interaction between “affection toward the care tasks” and “feelings of social restriction” was related to FWNS, in that “affection toward the care tasks” facilitated the effect of “feelings of social restriction” on FWNS ( $\beta = .328, p = .022$ ). **Conclusions:** For middle-aged female workers who were also caregiving for their parents, caregiving appraisal was an important contributor to FWNS. Future research should investigate the factors affecting FWPS.

**Key words:** caregiver, eldercare, employment, family relation, middle-aged

精神疾患を有する初産婦の周産期における夫の体験  
The Husbands' Experiences of Primiparas with a Mental Disease  
during Perinatal periods

41126009 水越 真依

Mai Mizukoshi

指導教員：上別府 圭子 教授

Tutor: Prof. K. Kamibeppu

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野  
Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,  
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

平成24年4月入学

Admission in April, 2012

目的：本研究は、精神疾患を有する初産婦の周産期における夫の体験を明らかにすることを目的とした。方法：2013年7月～12月に精神疾患を有する初産婦とその夫5組から同意を得て、妻に対しては産後うつ状態予測尺度を用いて質問紙調査を行い、夫に対しては半構造化面接を実施した。面接の分析には継続的比較分析を用いた。結果：精神疾患を有する初産婦の夫は、これまでの長い期間《妻に寄り添って共に歩んできた》という体験をしていた。出産後は《児が優先の生活を受け入れていく》という体験をしており、育児が加わったことによって夫にかかる負担が大きくなると夫はストレスを感じるようになり、そのストレスには、働き方の調整に困難を感じることに、親への打ち明け、産後の妻の精神状態、児の育てにくさの問題、が影響していることが明らかになった。また精神疾患に関して妻は、重要な支援者である自分の親にさえ自己開示の困難感を抱くことに、妊婦の治療方針の選択に夫も重要な関わりをしていることが明らかになった。体験を通して夫は《育児と妻の精神疾患に関してそれぞれ相談できる相手が欲しい》と望んでいた。考察：夫は、育児が始まってからは働き方の調整に困難を感じ、妻が自分の親に精神状態を打ち明けていない状況で、産後に精神不安定になり、さらに児の育てにくさの問題を抱えているという要因が重なった時に大きなストレスを感じていた。周産期ケアに関わる医療従事者は、精神疾患と治療方針について夫の理解を促すように努め、家事・育児の支援者への打ち明けの現状と家族の関係性を把握し、夫一人だけに妻のサポーターとしての負担がかからないように継続的な支援体制を構築する必要性が示唆された。

Key words: mental health, perinatal care, pregnancy, qualitative study, spouse



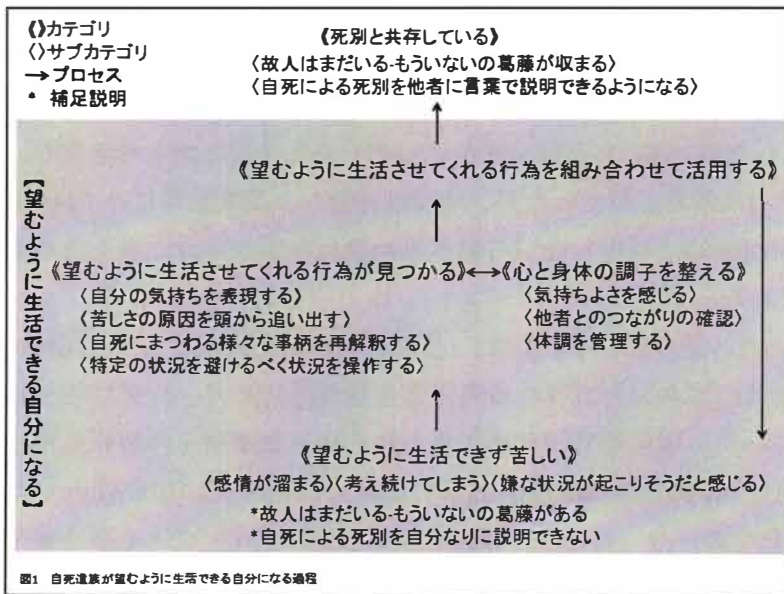
# 論文の内容の要旨

論文題目：自死遺族が望むように生活できる自分になる過程

桐谷（笠原） 麻美

**目的** 本研究は「日本において親、配偶者、きょうだい、子どもを自死で亡くした遺族が望む生活を回復・維持するための工夫」の探究を目的とした。

**方法** グラウンデッド・セオリー法を用いて、自死遺族 24 名のデータを収集・分析した。結果は図 1 にまとめた。



**結果** 自死遺族は、家族を自死で亡くしながらも望ましいと感じる生活を続けようとする。しかし喪失感によって度々《望むように生活できず苦しい》状態に陥る。その状態からなんとか逃れようともがくうち、〈自分の気持ちを表現する〉〈自死にまつわる様々な事柄を再解釈する〉〈苦しさの原因を頭から追い出す〉〈特定の状況避けるべく状況を操作する〉という、《望むように生活させてくれる行為が見つかる》。世間体などの理由で躊躇したりやる気にならなかつたりした望むように生活させてくれる行為には、〈気持ちよさを感じ

る)〈他者とのつながりの確認〉〈体調を管理する〉という《心と身体の調子を整える》ことで多少楽になって気力をやや回復してから踏み出す。望むように生活させてくれる行為がいくつか見つかり、遺族はそれらの《望むように生活させてくれる行為を組み合わせ活用する》ようになる。すると何度も戻ってくる《望むように生活できず苦しい》状態に対処できる機会が増し【望むように生活できる自分になる】。中には、落ち着いて生活できるように感じ《死別と共存している》状態に至る遺族もいる。しかし苦しい状態が何度も戻ってくるような期間がどのくらい続くか、苦しさが弱まる日が来るのか、遺族には予測できない。

《望むように生活できず苦しい》状態は【望むように生活できる自分になっ】た後にも度々生じていた。《望むように生活できず苦しい》状態に戻るたびに、遺族は《心と身体の調子を整え》たり、《望むように生活させてくれる行為が見つかる》ように試行錯誤する過程を繰り返していた。そうして繰り返すうちに、一度身につけた行為を似た状況に対して意図的に用いることを覚えて【望むように生活できる自分になっ】てゆくようだった。

#### 活用する行為のパターン

遺族が《望むように生活できず苦しい》状態から脱する際によく用いる行為にはいくつかのパターンが見られた。そのようなパターンは3通りで、それぞれを語り合い中心型、語り合い利用型、気晴らし型とした。遺族によってパターンが異なり、遺族の性格や年齢が影響しているようだった。パターンは遺族が置かれた状況の変化に応じて変わることもあるが、ID1(姉を亡くした弟)のように10代で死別後40年近く気晴らし型を続ける場合もあった。ID24(父親を亡くした娘)は、当初は父親が死んでくれてよかったと考えたり、母親との問題や学業に集中する気晴らし型だったが、時間が経過し、調査当時にはID24自身の気持ちを表現する機会を積極的に利用しながら聞き手の意見を取り入れて考え方を変化させる「語り合い中心型」となっていた。

語り合い中心型は11名だった。語り合い中心型は、〈自分の気持ちを表現する〉と同時に相手の意見も聞いていた。そうして自分とは異なる考え方を積極的に知り〈自死にまつわる様々な事柄を再解釈し〉ていた。本研究では自死にまつわる様々な事柄を再解釈した結果について多く語る場合でも、解釈のきっかけが対話の場合には語り合い中心型とした(ID17)。ID18(娘を亡くした父親)は〈苦しみの原因を頭から追いつく〉ことも多く遺族同士での対話が苦手と語っており気晴らし型と重複する特徴があった。しかし分かち合いスタッフとして間接的に経験を語ることや、見知らぬ他者に対して気持ちを打ち明けたことで気が楽になったと語っていることから、語り合い中心型とした。

分かち合いの会で自分の体験をしゃべるのはやっぱり苦手…中略…でその裏側としてしゃべりたい自分ていうのがいるわけですよ。で、…中略…夜の街行って、知らない酒屋行って、酔っ払って、知らないおじさんに、『うちの娘は自殺したんだ』(と打ち明けた)みたいなことは、何回かありました。…中略…スタッフになってみてこれは

正解だなと思いました。なぜかという、自分の経験をしゃべるのは苦手って申し上げたんですけれども。スタッフとしてしゃべるとわりと第三者的なものの言い方ができるかな、そのどっぷり自分のなかにはまらないで。それである程度その自分の溜まったものも吐き出せるっていう。(ID18)

語り合い利用型は、語り合い中心型よりも〈苦しさの原因を頭から追い出す〉行為を高頻度に用いていた。該当者は3名だった。

気晴らし型10名のうち、8名はQ代までに死別を経験していた。気晴らし型の遺族は〈苦しさの原因を頭から追い出す〉と同時に〈特定の状況を避けるべく状況进行操作する〉行為のうち、「表に出さない」でいることが多いようだった。望む生活を妨げそうな要因を解消できる保証がないとき、気晴らし型の遺族はあえて語り合おうとはしていなかった。

行って、行けばすごい自分の気持ちが楽になって、あとの生活が楽になるってんだったら行きますけど。行ったところで変わらないと思ったんですよね。だから行っても行かなくても変わらないんじゃないかと思って。だから行動するまでではないかなみたいなことを思いました。すごく。(ID11)

〈苦しさの原因を頭から追い出す〉方法としては、スポーツやアルバイト、仕事など好きなことを楽しみながら集中していた。こうして多くの気晴らし型の遺族は〈苦しさの原因を頭から追い出す〉と同時に《心と身体の調子を整えて》いた。「表に出さない」ことは《望むように生活できず苦しい》と感じる状態に対する根本的な解決にはならないが、同時に「好きなことを楽しむ」など〈心と身体の健康を整える〉ことで望む生活を維持しやすくしているようだった。ID16は夫が自死したといううわさが広まり生活が妨げられると感じたことをきっかけに住居を移し、仕事と育児に忙殺されることで〈家族の自死を頭から追い出した〉。このように〈苦しさの原因を頭から追い出し〉つつ、子どもの成長を楽しむとして〈心と身体の調子を整え〉ながらほぼ10年過ごした。

また、このパターンに含まれる遺族は、講演したり文章化することで〈自分の気持ちを表現し〉、感じていることや考えていることを整理している場合もあった。表現することを通じて整理していたのはID1、ID5、ID12だった。ID1(姉を亡くした弟)は、10代の頃に死別を経験して以来長期にわたり〈苦しさの原因を頭から追い出し〉、〈特定の状況を避けるべく状況进行操作し〉続けていたことに対して後ろめたさを感じていたが、きっかけがあって自分の体験を話すようになったと語った。ID1(姉を亡くした弟)は面接時の様子から現在は仕事や家庭に目を向け続けてきたことに満足している様子だった。

家族で一切触れなかった。…中略…僕は18で幼かったから、父親も話さないし、だとその経験を(片手の平を上にして、何かを持つような仕草をして) どうしていいか分からなくて、そのままにしておいたんでしょね。…中略…心理相談員やってたけど、自分が実は全然言わなかったから、後ろめたさはあったと思う。自分がスタッフ

やってるのに、隠している後ろめたさはあった。…中略…それ（きっかけがあつて）以来（機会があれば）毎回姉のことを言うようにしてる。毎回ね。自分が逃げないために（ID1）

ID5（息子を亡くした父親）や ID12（弟を亡くした兄）は、もともと好きだった書くという行為を、死別に際しても利用することで自分の気持ちを整理していた。

自分がパニックになって感情的になって泣きそうになったり…中略…そういうときは物書くってこう、書きはじめ、書き始めたり、この事態はいったい何事だつてまず書いてね。自分のことを書き始める。なんで俺はこんな状態になってるんだろうって。こんなことに文章化し始める途中で読者を意識する。そうするとコントロールできる。

（ID5）

以上のような組み合わせのパターンがあるにせよ、今回のインタビュー対象者は、《望むように生活できず苦しい》状態から様々な行為を活用して望む生活を続けられるようになっていた。このような変化をここでは【望むように生活できる自分になる】とした。【望むように生活できる自分になる】と、《望むように生活できず苦しい》状況が起こったときに望むように生活させてくれる行為のうちどれかを使って遺族はその状況に迅速に対応できる。そうして、望ましい生活をより円滑に続けることができる状態である。

**考察と結論** 本研究は、望む生活を維持している遺族がどのように生活を続けているのかを示した。本研究結果から、自死遺族が《望むように生活できず苦しい》状態への対応方法に関するヒントを得ることができると考える。同時に、自分が望む生活を維持するために活用している技術について客観的に確認し、遺族が自信を得るきっかけになる可能性がある。また本研究では、死別と共存している状態を示し、場合によっては《死別と共存している》状態に遺族が達しうることを示した。この状態に達する可能性があるということを知ることが《望むように生活できず苦しい》遺族が安心するような材料になる可能性があると考えている。

本研究で得た【望むように生活できる自分になる】という概念は、遺族が望ましいと感じる生活を維持するために行う工夫に着目し具体的な行動の連続として国内外で初めて示した。死別が遺族に及ぼす影響を意味づけを考慮する過程として捉えた点で、本研究は先行する死別研究の流れの一部に加えられる。本研究結果のうち他の死別を経験した遺族でも見られる概念については、発生条件を比較検討することで概念の適応範囲を広め、発展させる必要がある。

## 論文の内容の要旨

論文題目 重症心身障がい児を養育する家族のエンパワメントに関する実証的研究－養育肯定感への関連の検討－

氏名 藤岡 寛

### I. 緒言

身体障がいと知的障がい重複して重度な状態にあり、著しい活動制限を伴う、重症心身障がい児（以下、重症児）は、呼吸・摂食・姿勢保持など生活全般にわたり、専門的なケアが必要とされる。些細なきっかけで大きく健康状態を持ち崩し、ひとたび状態が悪化するとどんな治療にも抗い死に至る危険性がある。重症児を在宅で養育する家族が養育上自身に生じる身体的心理的及び経済的な問題を乗り越えていくためには、サービスの量と質が充実するだけでなく、重症児の養育に向けて家族自身が他者と協働する力・エンパワメントが必要である。しかし、従来はエンパワメントという用語が抽象的であり、スローガンの標語として用いられるに過ぎず、重症児の家族を対象にエンパワメントを実証的に明らかにした研究は国内外ともに皆無である。そこで、本研究では、家族支援の重要な指標であるエンパワメントと、エンパワメントのアウトカムである養育肯定感に注目し、日本における重症児を養育する家族のエンパワメント及び養育肯定感とその関連要因を実証的に明らかにすることを目的とした。

### II. 方法

横断的無記名自記式質問紙調査を行った。

#### 1. 操作的定義：エンパワメント

「家族が、重症児の養育に向けて、自分の生活をコントロールし、生活範囲内での外部と協働する状態または能力」と定義する。

#### 2. 対象

5-18歳の重症児の主養育者を対象とした。

#### 3. 手順

東京と茨城にある、3つの大学病院及び重症児療育施設の外来に定期受診のために訪れた、重症児の主養育者（対象者）に対して、研究者本人または各施設の担当医師が、本研究の趣旨を説明し、無記名自記式調査票への回答を依頼した。研究協力に同意した対象者は、調査票に回答し、同封されている返信用封筒にて研究者宛てに返送した。返送をもって同意とみなした。調査期間は2012年5月から2013年1月であった。

#### 4. 調査票

調査票は以下の項目で構成されている。

##### 1) 重症児の属性

性別・年齢・障がいの発生時期・確定診断の時期・在宅療養を始めた時期（在宅期間）・身体障害者手帳及び養育手帳の有無・ADL・身体及び精神機能・行動上の問題・睡眠問題・必要とされるケア（重症度）・利用しているサービス・外来受診施設の地域（東京・茨城）

##### 2) 対象者及び家族の属性

年齢・続柄・婚姻状況・職業・学歴・睡眠時間・慢性症状の有無・世帯収入・暮らし向き・体調・ライフイベント・ソーシャルサポート認知・養育負担感

##### 3) エンパワメント

家族エンパワメント尺度（家族ドメイン・サービスドメイン・社会/政治ドメイン）

##### 4) 養育肯定感

認知的介護評価尺度の肯定的評価サブスケール（介護充足感・被介護者への肯定的感情・自己成長感）

#### 5. 分析

各変数について、記述統計（名義・順序尺度については度数・割合、間隔尺度については平均・標準偏差）を算出した。

エンパワメント及び養育肯定感とその他の変数（説明変数）との関連を検討した。二変量の関連をみるために、t検定またはスピアマンの順位相関係数を用いた。

エンパワメント及び養育肯定感を目的変数とする重回帰分析を行なった。

#### 6. 倫理的配慮

研究協力にあたり、対象者に①協力は自由意思であること②協力しなくとも治療やケアに不利益は生じないこと③協力は途中でも撤回できること④個人情報保護されること、を約束し、遵守した。研究実施にあたって、あらかじめ本学及び研究実施施設の倫理委員会から承認を得た。

### III. 結果

調査票を122部配布し、76部回収した（回収率62.3%）。そのうち、1部はエンパワメント各ドメインで欠損が目立つため、除外した。よって、75名を分析対象とした（有効回答率61.5%）。

#### 1. 児と対象者の特性

75例のうち66例（88.0%）では、1歳未満での発症であった。主な診断名は脳性まひ、

周産期における低酸素性脳症後遺症、染色体異常、先天性神経疾患であった。1歳以上の発症例では、細菌性髄膜炎・麻疹後脳炎などが挙げられた。重症児スコアに基づく超重症児・準超重症児は28例(37.3%)であった。全ての例で外来受診をしており、その頻度は月1回程度とする例が多くを占めた(60例、80%)。リハビリテーションの受診(訓練)を66例(88.0%)がしており、ほとんどが月1回程度であった。短期入所を28例(37.3%)が利用しているが、月1回以上利用している例は9例(12.0%)にとどまっていた。訪問看護を11例が利用していた(いずれも東京)。ホームヘルプサービスを15例が利用していた(うち東京12例)。その他、訪問入浴や移動支援、子育てサービスなど市区町村による在宅サービスを4例(いずれも東京)が利用していた。エンパワメントの得点については、家族ドメイン  $37.02 \pm 7.47$ 、サービスドメイン  $39.09 \pm 7.40$ 、社会/政治ドメイン  $25.06 \pm 6.18$  (平均±標準偏差)であった。

## 2. エンパワメントと他の変数との関連

単変量解析での結果を以下に示す。東京の施設にかかっている例においてエンパワメントが高かった。児の問題行動や習慣があり、児に何らかの睡眠問題があるとエンパワメントが損なわれることがわかった。ライフイベントがある例、在宅サービス利用がある例の方が、エンパワメントが高かった。暮らし向きに満足しているほど、家族内外からのソーシャルサポートを認知しているほど、エンパワメントが高かった。

エンパワメントを目的変数とする重回帰分析では、上記変数のうち、児の睡眠問題・ライフイベント・暮らし向き・家族以外からのソーシャルサポート認知がエンパワメントに寄与していた。すなわち、児の睡眠問題(中途覚醒など)が無く、最近一年間で家族に死別・病気・引っ越しなどの生活上の変化(ライフイベント)が有り、暮らし向きに満足していて、家族以外からの支援を得ていると認知していると、エンパワメントが高かった。中でも、家族以外からのソーシャルサポート認知がもっともエンパワメントに寄与していた。

## 3. 養育肯定感と他の変数との関連

単変量解析での結果を以下に示す。東京と茨城では、東京の施設にかかっているケースで、養育肯定感が高かった。療育手帳を持っておらず、問題行動・習慣が無いケースで、養育肯定感が高かった。対象者自身が慢性症状をもっており、同居している家族の人数や同胞の人数が少ないと、養育肯定感が高かった。家族以外からのソーシャルサポートを認知しており、在宅サービスを利用しているケースで、養育肯定感が高かった。養育負担感が低く、エンパワメントが高いと養育肯定感が高かった。

養育肯定感を目的変数とする重回帰分析では、家族以外からのソーシャルサポートは養育肯定感への寄与を認めなかった。一方、在宅サービス利用は寄与を認めた。もっとも寄与を認めたのは、養育負担感であり、養育負担感が軽減されると養育肯定感が高まること

が明らかになった。また、エンパワメントの家族ドメイン・社会/政治ドメインで寄与を認めた。

#### 4. 自由回答

児の養育に関する現在の境遇および専門職者やサービスシステムに対する意見を任意で回答を得た。サービスに関する多岐のニーズが明らかになった。

### IV. 考察

本研究により明らかになったエンパワメント及び養育肯定感とその関連要因に関して、実際の支援の方略を考察する。

児の睡眠問題があると、養育する家族の生活上のコントロールを損ねる可能性がある。児の緊張やけいれんのコントロールをはかり、生活リズムを安定させることが、養育する家族の生活コントロール、ひいては家族エンパワメントの向上に必要である。ライフイベントに関しては、生活上の変化を原動力として家族自身が養育に向かう力を発揮させた結果だと解釈することができる。ただし、生活上の変化の内容や質を更に吟味して今後検討を要する。暮らし向きに関しては、家族の生活基盤となる、経済状況を慎重にアセスメントする必要がある。ソーシャルサポート認知に関しては、特に家族以外からのソーシャルサポート認知がもっともエンパワメントに寄与していた。重症児の養育では、人工呼吸器や経腸栄養の管理、発作時の対処など専門的な知識や技術が要求される。専門職者が、児や主養育者、さらに他の家族員を全体的に支援することが、その後家族が児の養育を継続していくためには、特に重要となる。

次に、養育肯定感に関しては、まずは養育負担感が軽減されることが一義的に存在するが、さらに在宅サービスの利用と対象者（または家族）自身のエンパワメントの向上が、養育肯定感を高めることが明らかになった。養育肯定感を向上・維持していくためには、サービス提供の際に、家族をエンパワーしていく働きかけが重要となる。たとえば、サービスの際に、児の成長とも思えるわずかな変化に注目して、それを家族と共有するなど、家族が養育に向けて前向きな気持ちになれるような関わりが求められる。

### V. 結論

エンパワメントの関連要因として、児の睡眠問題・ライフイベント・暮らし向き・家族以外からのソーシャルサポート認知が明らかになった。中でも、家族以外からのソーシャルサポート認知がもっともエンパワメントに寄与していた。また、家族支援の本質的な目的である、養育肯定感を向上・維持していくことに関して、養育負担感の軽減とソーシャルサポートの確保に加えて、新たにエンパワメントの存在が示された。重症児の養育では専門的な知識や技術が要求される。そこで、専門職者が家族全体をエンパワーする支援が、養育肯定感を高めるために重要となる。



Family factors related to elementary school children's handwashing behaviors  
in the Philippines  
フィリピンにおける小学生の手洗い行動に関連する家族要因

41136002 李 孝媛  
Hyowon Lee

Tutor: Prof. Kiyoko Kamibeppu  
指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,  
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo  
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

Admission in April 2013  
平成25年4月入学

**OBJECTIVES:** This study aimed to investigate parent-child bonding, children's handwashing-related attitudes and self-efficacy, parenting style, parents' handwashing-related attitudes and self-efficacy, and parents' handwashing behaviors as potential correlates of children's handwashing behaviors in the Philippines.

**METHODS:** A cross-sectional study using self-report questionnaires was conducted during November and December 2014 at a public elementary school in Cavite Province, Philippines. Multiple linear regression analysis was performed to determine the variables significantly associated with children's self-reported handwashing consistency based on established key handwashing times, while multivariate logistic regression analysis assessed correlates of children's self-reported soap use consistency. **RESULTS:** Data from 222 child-parent paired data were analyzed. Children's handwashing consistency was related to parental involvement in their life ( $\beta=0.22$ ,  $p=0.001$ ), their perceived handwashing-related benefits ('feeling more attractive' [ $\beta=0.15$ ,  $p=0.015$ ] and 'getting sick less often' [ $\beta=0.16$ ,  $p=0.011$ ] when washing hands), and their perceived handwashing-related self-efficacy ( $\beta=0.15$ ,  $p=0.014$ ), among other situational and individual-level factors.

Factors associated with children's soap use consistency, meanwhile, included permissive parenting style (AOR=2.93,  $p=0.005$ ) and parents' higher perceived handwashing-related benefits (AOR=3.80,  $p=0.013$ ).

**CONCLUSION:** Our findings suggest that parental factors may be most influential in promoting children's optimal hand hygiene behavior quality once the practice has already been established. On the other hand, the child's own attitudes, self-efficacy, and sense of parental bonding appear to be more important in facilitating initiation of the basic hygiene practice at the appropriate times. Interventions to promote more consistent and thorough handwashing practices in the Philippines and similar settings should thus incorporate both parental and individual-level factors accordingly.

**Key words:** developing country, handwashing, health promotion, parenting style, school children

Qualitative study exploring the experience of post-diagnosis uncertainty  
among patients with ultra-orphan immunological diseases.  
超稀少な免疫疾患患者が診断後に抱える「不確かさ」の内容とその経過に関する質的調査

Shun Emoto  
41136004 江本 駿

Tutor: Prof. K. Kamibeppu  
指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,  
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo  
東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野

Admission in April, 2013  
平成 25 年 4 月入学

**Objectives:** This study aimed to conduct an in-depth exploration into the contents and processes of uncertainty surrounding the health-care seeking behaviors of patients diagnosed with ultra-orphan immunological diseases. **Methods:** Semi-structured interviews were conducted with 11 patients. Interview data were analyzed using the modified grounded theory approach (M-GTA). **Results:** The patients with ultra-orphan immunological disease revealed that, at diagnosis, they were convinced that they had received an accurate diagnosis of their subjective symptoms, and then developed an image of their disease based on their physicians' explanations at diagnosis. After the diagnosis, they at first struggled to minimize the uncertainty derived from the inconsistencies between their subjective symptoms and the clinical picture of their disease. However, the more knowledge they accumulated about the disease from expanded consultations, the more they gradually understood that many medically unresolved aspects of their disease still existed. While they reconciled these aspects emotionally, they tried to receive better medical service, even in this uncertain situation, as they focused more on the medically resolved aspects. **Conclusions:** Health care providers need to respect patients' desires to more fully understand their disease and to ensure reasonable and satisfactory health care services. It is also essential to develop a collaborative relationship with patients toward jointly overcoming the disease while maintaining a balance between the symptoms of which the patients complain and the clinical picture of the disease.

Key words: immune system disease, modified grounded theory approach, rare diseases,  
ultra-orphan disease, uncertainty

Factors related to mother-child communication openness  
about fathers with neurobehavioural sequelae after brain injury  
高次脳機能障害になった父親について、母親と子どもが行うオープンなコミュニケーションに  
関連する要因の探索

41116010 Shiho Takanashi

高梨 志帆

Tutor: Prof. Kiyoko Kamibeppu

指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,

Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 家族看護学分野

Admission in April 2011

平成 23 年 4 月入学

**Objective:** The present study clarified factors related to mother-child communication openness when fathers suffer neurobehavioural sequelae after stroke or traumatic brain injury. **Research design:** A cross-sectional study using self-report anonymous questionnaires was conducted. **Methods and procedures:** Twenty-seven mothers with 6- to 22-year-old children participated. The questionnaire examined personal factors (mother's psychological distress), social/family factors (family support functioning), illness-related factors (father's time at home and neurobehavioural sequelae severity), and mother's perceived level of open communication. Multiple regression was used to analyse factors related to mother-child communication openness. **Results:** Mother-child open communication was explained by family support functioning ( $\beta = 0.454$ ), father's time at home ( $\beta = -0.395$ ), and mother's psychological distress ( $\beta = -0.355$ ). Neurobehavioural sequelae severity was not associated with mother-child open communication. **Conclusions:** Personal, social/family, and illness-related factors were related to mother-child communication about paternal illness. Professionals should promote optimal family support functioning, connect families with external resources, and assess families' interaction processes. **Key words:** behavioural symptoms, brain injury, cognitive impairment, family, stroke

Future long-term care setting preferences and related factors  
among middle-aged and older men living with HIV  
中年期以降の男性HIV陽性者における介護場所の意向とその関連要因

41136012 Ayako Fujita

藤田 彩子

Tutor: Prof. Kiyoko Kamibeppu

指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,  
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo  
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

Admission in April 2013

平成25年4月入学

**Purpose:** This study was undertaken to describe the preferences for long-term care (LTC) setting among middle-aged and older Japanese men living with HIV, and to examine factors related to such preferences.

**Methods:** An anonymous self-administered questionnaire survey was conducted at an AIDS Core Hospital in Tokyo. Participants were asked where they wanted to live once they could no longer care for themselves and needed assistance with tasks of daily life. Multivariable logistic regression assessed correlates of LTC setting preference based on data from 137 respondents. **Results:** Roughly half of participants expressed a preference to live in a designated facility for the aged or for LTC, while around one-third preferred to remain at home or to live with family, a partner/lover, or a friend (i.e., in “familiar housing”). Participants who had any children (adjusted odds ratio [AOR]=0.12, 95% confidence interval [CI]: 0.02, 0.95), who lived with any kin or with non-kin rather than alone (AORs=0.20 and 0.16, 95% CIs: 0.04, 0.93 and 0.04, 0.66, respectively), and who reported higher satisfaction with support from family, regardless of kinship (AOR=0.29, 95% CI: 0.09, 0.98), were less likely to prefer to live in a designated housing facility for the aged or for LTC as compared to familiar housing.

**Conclusion:** Findings suggest that living with and/or perceived satisfaction with support from not only biological or legal family, but also, for those without conventional family, significant others and self-defined family are important and salient indicators regarding preferences for LTC setting among men living with HIV to age in place.

**Key words:** aged, HIV infections, long-term care, patient preferences, residence characteristics

The effect of support from day care centers with nurses on staff on parenting stress among mothers  
of children with chronic diseases

看護職配置保育所に通園する慢性疾患児の母親における育児ストレスと保育所から受ける支援との関連

41116014 Yuki Matsubara

松原 由季

Tutor: Prof. Kiyoko Kamibeppu

指導教員: 上別府 圭子 教授

Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and Nursing,

Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野

Admission in April 2011

平成23年4月入学

**Objective:** To examine relationships between parenting stress experienced by mothers of children with chronic diseases and the support received from day care centers with nurses on staff. **Methods:** A cross-sectional survey using anonymous self-reported questionnaires was conducted from October to November 2014 with 77 mothers of children with chronic diseases who used day care centers with nurses on staff. Parenting stress was measured via the Parenting Stress Index. Support was evaluated by using items developed via a focus group interview with 7 nurses in day care centers, using examples from previous studies. Multiple regression analyses were conducted to examine relationships between parenting stress and support. **Results:** Data from 44 mothers were analyzed. Greater satisfaction with the support received from day care centers ( $\beta = -.268$ ) was related with lower parenting stress. As for the types of support, “explanation to an attending doctor and confirmation of points for special attention” ( $\beta = -.346$ ), “understanding treatment history and current health status” ( $\beta = -.322$ ), “communications with external resources such as medical institutions” ( $\beta = -.330$ ), and “bridging families and external resources such as medical institutions” ( $\beta = -.299$ ) were inversely related with parenting stress. **Conclusion:** The support from day care centers with nurses lowered parenting stress of mothers. In particular, support for exchanging the child’s information between day care centers and external resources significantly affects parenting stress. Support for children with chronic disease should thus be provided with involvement of nurses and contract doctors in day care centers.

**Key words:** child day care centers, chronic disease, family nursing, nurse’s role, social support

出生前に先天性心疾患の診断を受けた子どもに関する母親の時間的展望  
—「普通」という意味の経時的な変容とその契機—

Temporal perspectives of mothers regarding their babies prenatally diagnosed with congenital heart defects: Evolution and turning points on meanings of “normalcy”

41136064 丸山 暁子  
Akiko Maruyama

指導教員: 上別府 圭子 教授  
Tutor: Prof. K. Kamibeppu

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野 看護師コース  
Advanced Nurse Course, Department of Family Nursing, Division of Health Sciences and  
Nursing, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

平成 25 年 4 月入学  
Admission in April, 2013

目的: 出生前に先天性心疾患の診断を受け、自宅で生活している生後1~4ヶ月の子どもに関する母親の時間的展望を契機とともに記述した。方法: 生後1~4ヶ月の先天性心疾患の子どもと自宅で一緒に生活している母親7名に、半構造化面接を実施した。分析は複線径路・等至性モデルを参考にした。結果: 流産など母親の過去の経験によって、先天性心疾患に対する母親の受け止め方は様々であったが、超音波検査の画像を見たり、信頼する医師から告げられたりしたことで、7名とも出生前の子どもは「普通」ではないと感じていた。しかし今まで通りの元気な胎動を感じることによって、出生前の子どもは、本当は「普通」かもしれないと期待していた母親もいた。先天性心疾患は内部障害であるため、生後の子どもは「普通」に見えたが、集中治療室に入院し医療機器に囲まれた姿や手術創がついた姿は「普通」ではなく見えた。子どもの入院中は、自由に子どもに触れる事ができず「普通」ではないと感じていたが、退院が近くなり、育児指導が始まると、「普通」に近づいていると感じていた。子どもに自由に触れる時間が増えたことで母親は、この子にとっての「普通」の状態を探しつつ、日々新発見していた。さらに自宅で子どもと一緒に生活することによって、7名とも自分の子どもは「普通」の日常生活を送ることができていると実感していた。結論: 出生前に先天性心疾患の診断を受けた自分の子どもに関する「普通」という言葉の意味が、経時的に複層化したと考えられた。「疾患のない健康」という意味に加え、退院が近づき子どもに触れる時間が増えたことで、「先天性心疾患の自分の子どもにとっての通常」という意味を新発見しつつも、さらに探求し続けており、自宅で子どもと一緒に生活を送ることで「日常生活は疾患のない健康の子どもと同様」という意味が足された。

Key words: congenital heart defects, mother-child relations, normalcy, prenatal diagnosis, Trajectory Equifinality Approach,

## 論文の内容の要旨

論文題目 妊娠期からの親向けの

乳幼児予防接種教育プログラムを用いた介入研究

大塚（小野） 寛子

### 背景

近年、予防接種率の向上により、先進国ではワクチンにより予防可能な疾患への罹患が減少している。しかし、日本では任意接種ワクチンの予防接種率が低いために、ワクチンにより予防可能な疾患への罹患が多い。日本の予防接種制度には諸外国にはない特有の分類があり、予防接種法で定められた定期接種と、法の定めのない任意接種が併存する。任意接種は原則自費であるため親には経済的負担が生じる。予防接種を受けるかどうかは親の意思決定に委ねられており、親が任意接種についての情報を探す、医療機関に問い合わせるといった行動を自ら起こさないと接種できないという特徴がある。

本研究では、日本で生後2か月からの接種が推奨されている4つのワクチンに着目した。小児期にB型肝炎ウイルスに感染し、その感染が慢性化した成人の25%はB型肝炎に関連した肝癌もしくは肝硬変により死亡するため、小児期におけるキャリア化の予防は重要な課題である。ロタウイルス感染症は小児の重症下痢症の原因として最も頻度が高く、大部分の小児が2～3歳までに感染し、日本では年間44例が脳炎・脳症を起こし重症化し、死亡例は10例未満と報告されている。Hibによる細菌性髄膜炎の約5%が死亡し、約20%が後遺症を残す。肺炎球菌による細菌性髄膜炎の約10%が死亡、約30%が後遺症を残す。接種時期が遅延すると細菌性髄膜炎にかかりやすくなり後遺症や死亡のリスクが高まる。

日本には親のニーズに基づいた乳幼児予防接種教育はなく、任意接種と定期接種が併存するという日本の状況に合った教育プログラムを考案する必要がある。そこで、本研究では、研究Ⅰで乳幼児予防接種についての情報提供に関する母親のニーズを明らかにし、乳幼児予防接種における教育プログラムの対象者・方法・教育時期・内容を検討の上、ニーズに基づいた教育プログラムを考案する。研究Ⅱでは、乳幼児予防接種教育プログラムの有効性を評価する。

## 研究 I : 親向けの乳幼児予防接種教育プログラムの考案

### 目的

乳幼児予防接種についての情報提供に関する母親のニーズを明らかにする。特に、乳幼児予防接種における教育プログラムの対象者・方法・教育時期・内容を検討する。さらに、ニーズに基づいた乳幼児予防接種教育プログラムを考案することを本研究の目的とする。

### 方法

調査の準備として、先行研究、既存資料、研究チームと専門家の意見等をもとに教育プログラム用の教材と医療者向けの手引きの pilot 版を作成した。次に、母親のニーズを明らかにするために、インタビューガイドと pilot 版を用いて乳幼児をもつ母親への半構造的インタビューを実施した。分析は内容分析法、記述分析法及び要旨分析法を用いた。母親のニーズに基づき教育プログラム pilot 版を改訂し、一般の妊産婦・母親に教材・情報提供方法について意見を得て、表面妥当性について確認した。さらに、研究チームで最終確認を行った。

### 結果

研究参加者は 25 名で、以下のようなニーズが明らかになった。第一に教材に夫へのメッセージを盛り込んで、医療者から直接・間接的に夫への働きかけをしてほしいというニーズ、第二に妊娠中からかかりつけの小児科を探しておくことをもっと強調して伝えてほしいというニーズ、第三に接種の遅延に関するリスクについて十分に知られていないこと、初回接種する時期と初回接種するワクチンを明示してほしい、任意接種についての情報を伝えてほしい、同時接種が必要なことを強調してほしいというニーズ、第四に情報を自分で探さなくてもよいよう信頼のおける情報源を提示してほしいというニーズが挙げられた。

母親のニーズを基に、以下の四つの要素をもつ乳幼児予防接種教育プログラムに改訂した。乳幼児予防接種教育プログラムの要素一は、夫・家族参加型の教育的介入により、予防接種についての話を促し、教材はコミュニケーション・ツールとして活用する。要素二は、妊娠中から予防接種を受ける準備行動（かかりつけ医・医療機関探し）を促す。要素三は、ワクチンにより予防可能な疾患、接種開始時期と適時接種の必要性を伝える。要素四は、対象者に合った予防接種の最新情報へのアクセス方法を確認するというものである。

考案した乳幼児予防接種教育プログラムの概要は、初産・経産両者を対象に、夫の予防接種教育への参加と啓発を取入れ、妊娠後期の健診時に個別教育を行い、産後 1 か月健診時に予防接種の準備状況を確認するものである。

### 考察

本研究における最も新しい知見は、夫と話合って接種するかどうかの意思決定ができるよう夫への働きかけをしてほしいという母親のニーズが明らかになったことであり、定期接種と任意接種が併存する日本に特有な母親のニーズである可能性が考えられた。



## 研究Ⅱ：ランダム化比較試験による乳幼児予防接種教育に関するプログラムの評価

### 目的

本研究の目的は、研究Ⅰで考案した、夫への働きかけを取り入れた、四つの要素をもつ乳幼児予防接種に関する親向けの教育プログラムの有効性を評価することである。

### 方法

並行群間ランダム化比較試験を行い、乳幼児予防接種に関する親向けの教育プログラムの有効性を評価した。研究に参加した妊産婦を初産・経産を割付け調整因子とし、介入群またはコントロール群にランダムに割りつけた。

コントロール群は研究協力病院の通常の保健教育である産後入院中の集団指導を受けた。介入群は通常の保健教育に加え、本研究による介入を受けた。本研究による介入とは可能ならば妊産婦の夫または家族の同席を依頼し、妊娠後期の健診時に親向け教材を用いて個別的教育を行い、産後1か月健診時には可能ならば夫または家族も同席のもと、予防接種を受けるための準備ができているかをチェックリストに沿って確認するというものである。

なお、この乳幼児予防接種教育プログラムは、Health Belief Modelに基づいている。妊娠後期および生後3か月の二時点で質問紙調査を実施し、教育プログラムの有効性を評価した。主要評価項目は生後3か月時点でのB型肝炎ワクチンの接種割合とし、Intention-to-Treat (ITT)解析を実施した。

### 結果

225名に研究協力を依頼し、研究に参加した妊産婦175名(77.8%)を介入群88名、コントロール群87名にランダムに割りつけた。171名(97.7%)を解析対象とした。

生後3か月時点のB型肝炎ワクチン( $p<0.001$ )、ロタウイルスワクチン( $p<0.05$ )の接種割合は、コントロール群と比較して有意に介入群が高かったが、定期接種であるHibワクチンと小児用肺炎球菌ワクチンの接種割合は、群間で有意差はみられなかった。接種したワクチンの数( $p<0.001$ )、4つのワクチンを完了した対象者の割合は、有意に介入群のほうが高かった( $p<0.001$ )。

夫と子どもの予防接種について一緒に考え話合することができるかは群間で有意差はなかったが、介入群では有意に両親で子どもの予防接種を受けるかどうかの意思決定をしていた( $p<0.05$ )。予防接種に対する意向( $p<0.01$ )、予防接種に関する知識( $p<0.001$ )、予防接種に関するヘルスリテラシー(必要になったら、予防接種に関する情報を自分自身で探し利用できる)は、介入群で有意に高かった( $p<0.01$ )。しかし、予防接種を受ける準備行動(かかりつけ医・医療機関探し)、予防接種に関する態度と信念は、群間で有意差はなかった。

### 考察

先進的な取り組みをしている病院において、夫と話合って接種するかどうかの意思決定ができるよう夫への働きかけをしてほしいという母親のニーズに基づいた乳幼児予防接種に関する教育プログラムを実施したところ、任意接種ワクチンの予防接種割合、子どもの予

予防接種を受けるかどうかの意思決定を両親で行う、予防接種に対する意向、予防接種に関する知識、予防接種に関するヘルスリテラシーで効果が示された。母親のニーズを基に、夫への啓発を行ったこと、予防接種に関するヘルスリテラシーに働きかけたことが特に効果的であった。

介入群では有意に両親で子どもの予防接種を受けるかどうかの意思決定をしていた。任意接種と定期接種が併存する日本では、特に任意接種のワクチンを受けるかどうかは親の意思決定に委ねられているという現状がある。そのため、家族への支援として妊産婦だけではなく夫または児の保護者等の家族を含め、予防接種について一緒に考え話し合いを促進するという支援は重要である。

必要になったら予防接種に関する情報を自分自身で探し利用できるよう親のヘルスリテラシーに働きかける教育的介入に効果があったことは、今後の予防接種行動につながると考えられた。

Hib ワクチンおよび小児用肺炎球菌ワクチンの接種割合は、いずれも群間で有意差はなかった。その理由として、定期接種であり親の経済的な負担がないこと、本研究参加者は通常のケアとして入院中に乳幼児予防接種についての集団教育を受けていたため適時接種ができていたと考えられた。

本研究では個別的教育介入を実施したが、今後は臨床での費用対効果と実現可能性を考慮し効率的にすべての対象者に教育が行渡るよう集団教育を主体にし、集団教育に参加できなかった者へは個別教育を行う等、介入方法についての検討が課題である。

## 結論

先進的な取り組みをしている病院における乳幼児予防接種に関する親向けの教育プログラムの有効性が示された。特に、考案した教育プログラムのオリジナリティである、夫に働きかける夫・家族参加型の教育的介入で夫が参加できない場合でもコミュニケーション・ツールとして教材を活用したこと、必要になったら予防接種情報を自身で探し利用できるよう対象者に合った予防接種の最新情報へのアクセス方法を確認するという介入が効果的であった。

子どもの予防接種を受けるかどうかの意思決定を両親で行うことに効果があった点、予防接種に関するヘルスリテラシーで効果が示された点は、我々の知る限り世界初の成果である。

## 論文の内容の要旨

論文題目 がん拠点病院を含む一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の  
家族介護者における、ケアの満足度と Quality of Life に関する研究

氏名 森下 美紀

### 研究目的

一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者において、Quality of Life (QOL) を高める支援が必要とされる。しかし、QOLの実態は明らかにされておらず、具体的な支援方法は確立されていない。そこで、ケアの満足度が家族介護者のQOLに関連しているという仮説を立て、家族介護者が認識するケアの満足の内容を明らかにした後に、QOLとの関連を検証することとした。

本研究の目的は、一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者において、① 家族介護者が認識する、患者と家族介護者への医療者から受けたケアの満足の内容を明らかにすること、② QOLの実態を明らかにすること、③ ケアの満足度を中心に、介護負担感、家族機能とQOLの関連を明らかにすることである。

### 本研究のデザイン

方法論的トライアングレーションを使用した。まず、家族介護者が認識する、患者と家族介護者への医療者から受けたケアの満足の内容を明らかにするため(目的①)、半構造化面接を行い質的に分析した(研究Ⅰ)。その後、QOLの実態を明らかにし(目的②)、また、研究Ⅰで明らかにしたケアの満足の内容を満足度尺度として、ケアの満足度を中心に介護負担感、家族機能とQOLの関連を明らかにするため(目的③)、質問紙調査を行った(研究Ⅱ)。

本研究は東京大学大学院医学系研究科・医学部および各施設の倫理委員会の承認を得た。

### 研究Ⅰ 家族介護者が認識する、患者と介護者への医療者から受けたケアの満足の内容を明らかにする

#### 方法

##### 1. 研究参加者

がん拠点病院を含めた一般病棟に入院中の20歳以上の終末期消化器がん患者とその家族介護者(各患者に対し1名)とした。終末期消化器がん患者とは、原発が消化器がんの診断で、調査時の入院において病状から手術療法や化学療法が行えず、症状緩和目的で入院している患者と定義した。患者の除外基準は入院前のBarthel Indexががん以外の疾患により40点以下の者とし

た。家族介護者の適格基準は、患者の主介護者であること、意思疎通ができることとし、調査者・医療者により研究参加が不適切とみなされた者は除外した。

## 2. データ収集

研究者と師長が基準に合う対象者候補を選定した。その後、研究者が説明文書と口頭で対象者に研究参加の依頼をし、正式な同意を患者と家族介護者から文書にて得た。その後、プライバシーの保たれた個室にて半構造化面接調査を行い、面接終了後に家族介護者の特性について記入された質問紙をその場で回答してもらった。最後に研究者が患者の診療録調査を行った。

## 3. 調査内容

半構造化面接においては、Care Evaluation Scale (CES) の下位尺度それぞれとそれ以外の内容に対し、療養期間内に院内で受けたケアについて、家族介護者の認識から満足と感じたケアの内容と、不満足を感じ改善により満足できると考えられるケアの内容を尋ねた。診療録調査では医学的特性を得た。

## 4. 分析

クリッペンドルフの質的内容分析の手法を参考にした。逐語録を、意味内容ごとに文脈を重視して分割し、コードを作成した。コードの類似性をもとにサブカテゴリをまとめ、サブカテゴリの類似性をもとにカテゴリを作成した。

## 結果

10名の家族介護者に面接を行った。9名が女性であり、平均 $53.8 \pm 14.8$ 歳だった。6名が患者の配偶者であり、4名は子どもだった。患者は4名が女性であり、平均 $69.5 \pm 8.4$ 歳だった。分析の結果、「疼痛や消化器症状をはじめとした苦痛症状に対する、緩和への迅速さや的確さ、配慮がある」(8サブカテゴリ)、「専門性のあるスタッフの役割を發揮し、スタッフ間の連携や一貫性を持つ」(7サブカテゴリ)、「それぞれの患者に合った検査および内服の説明や、患者と家族介護者へのこれからの治療方針を含めた情報提供がある」(4サブカテゴリ)、「現在までの治療過程に対しての家族介護者の納得と、治療過程の理解を持った関わりがある」(4サブカテゴリ)、「ケアへの参加の促し」(2サブカテゴリ)、「家族介護者の精神面や日常生活への気づきがある」(5サブカテゴリ)の6カテゴリ30サブカテゴリが抽出された。

## 考察

本研究は、一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者として幅広い対象からケアの満足の内容を明らかにした。先行研究同様に苦痛症状に対して迅速な症状緩和の重要性が示された。また、原因療法への期待や、迅速さだけでなく症状緩和の方法についても満足につながっていることは一般病棟の家族介護者の特徴であり、新たな知見であった。したがって、情報提供

や選択肢を考慮し個別に合わせた苦痛症状への緩和の重要性が示唆された。スタッフとの関わりについては、医師や看護師だけでなく緩和ケアチームとの関わり的重要性が示唆され、緩和ケアチームが介入する理由や家族介護者の緩和ケアチームの捉え方を理解することが必要と考えられた。それぞれの患者に合った説明や情報提供では、患者への説明について家族介護者と相談し、どこまで患者へ伝えるか検討する必要性が示唆された。また、終末期であっても診断や治療の過程について、医療者に理解を持った関わりを希望していたことは新たな発見であった。

## 研究Ⅱ QOLの実態、ケアの満足度を中心としたQOLの関連要因を明らかにする

### 1. 研究参加者

研究Ⅰと同一の基準の患者とその介護者とした。

### 2. データ収集

研究者と師長が基準に合う対象者候補を選定した。その後、研究者が説明文書と口頭で対象者に研究参加の依頼をし、正式な同意を患者から文書にて得た。同意が得られた患者の家族介護者に質問紙を配布し、返信にて同意とした。配布後、研究者が診療録調査を行った。

### 3. 調査内容

QOL尺度として Caregiver Quality of Life Index Cancer (CQOLC) を用い、アウトカムとした。また、一般集団と比較するために、MOS 8-item Short-Form Health Survey (SF-8) アキュート版を使用した。また、研究Ⅰで抽出したケアの満足の内容であるサブカテゴリ 30項目に加えて、CESの項目の中で、研究Ⅰの中で抽出されなかった3項目を付け加えた33項目を本研究のケアの満足度尺度とした。介護負担感には Caregiver Reaction Assessment Japanese version を使用した。家族機能は Family Relationship Index を使用した。また、家族介護者の年齢や性別などの特性を尋ねた。診療録調査では、医学的特性を得た。

### 4. 分析

CQOLCについては先行研究の得点と1標本t検定で比較し、SF-8については国民平均値と比較するため、1標本t検定とCohenの効果量を算出し、QOLの実態を明らかにした。その後、「ケアの満足度尺度の合計得点」を含めた変数を強制投入し、CQOLCの合計得点をアウトカムとした重回帰分析を行った。また、QOLに関連するケアの満足の内容を明らかにするため、「ケアの満足度尺度の合計得点」の代わりに、ケアの満足度尺度の下位尺度得点を1つずつ入れ替え、それぞれの標準化偏回帰係数( $\beta$ )と決定係数( $R^2$ )を算出した。有意水準は両側5%とした。

## 結果

51名の家族介護者から質問紙の返信があった(回収率82%)。43名(84%)は女性であり、

平均 59.7±15.0 歳だった。続柄は配偶者が 35 名 (69%)、患者の子どもが 9 名 (18%) だった。患者は 37 名 (73%) が男性であり、年齢は 66.6±11.5 歳だった。

QOL は国民平均値と比較したところ、すべての項目得点が有意に低く、PCS と MCS の効果量はそれぞれ 0.4 と 2.2 であった。CQOLC に関しては、介護が必要な在宅がん患者の家族介護者と比較して、「心理的負担感」についての本研究の対象者の得点が有意に低かった ( $p < 0.001$ )。ケアの満足度の合計得点が高いほど QOL が高いことが示された ( $\beta = 0.246, p = 0.043$ )。特に、「疼痛や消化器症状をはじめとした苦痛症状に対する、緩和への迅速さや的確さ、配慮がある」( $\beta = 0.249, p = 0.027$ ) と「現在までの治療過程に対しての家族介護者の納得と、治療過程の理解を持った関わりがある」( $\beta = 0.230, p = 0.048$ ) の満足度が高いほど QOL が高いことが示された。また、家族介護者の年齢が高いほど ( $\beta = 0.342, p = 0.016$ )、ゆとりがあると認識しているほど ( $\beta = 0.254, p = 0.032$ )、家族介護者自身の健康状態に影響していると負担に感じていないほど ( $\beta = -0.542, p = 0.001$ )、家族機能が良いほど ( $\beta = 0.245, p = 0.019$ )、QOL が高いことが示された。

## 考察

本研究の対象者の QOL は、MCS に対して 2.2 の効果量だったこと、CQOLC の「心理的負担感」が治療期を含めたがん患者の家族介護者と比較して有意に低かったことから、QOL が低く、精神面に対する支援が重要と考えられた。

また、ケアの満足度と QOL の関連が示された。これまでに、終末期がん患者の家族介護者にとって患者の苦痛症状の緩和についての重要性の高さは示されており、「疼痛や消化器症状をはじめとした苦痛症状に対する、緩和への迅速さや的確さ、配慮がある」の満足度が QOL に関連したと示唆される。また、がん患者の家族介護者は、終末期までに患者とともに多くのことを意思決定しており、終末期にはこれまでの決定について後悔や自責の念を感じる人が多い。そのため家族介護者の思いをもとに医療者が治療過程を理解することが重要であり、「現在までの治療過程に対しての家族介護者の納得と、治療過程の理解を持った関わりがある」の満足度が QOL に関連したと考えられる。したがって、患者に合った苦痛症状への対処方法や、これまでの治療過程を理解した患者と家族介護者への関わりが、QOL を高めるために重要であることが示唆された。

## 結論

がん拠点病院を含む一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者において、家族介護者が認識する、患者と家族介護者への医療者から受けたケアの満足の内容を明らかにした。また、一般集団や治療期のがん患者の家族介護者と比較して QOL が低いこと、QOL に対してケアの満足度を中心に介護負担感、家族機能との関連を明らかにした。本研究により、一般病棟に入院中の終末期消化器がん患者の家族介護者の QOL に対し、具体的な支援策を示唆したことは意義が大きいことであると考えられる。

家族看護学教室 教室員（平成 25 年度～平成 26 年度）

教授	上別府圭子
非常勤講師	法橋 尚宏
	清水 敬生
	星 順隆
	岩田 力
	山崎あけみ（～平成 27 年 3 月）
助教	涌水 理恵（平成 25 年 4 月～）
	池田 真理（～平成 26 年 3 月）
	佐藤 伊織
	福澤利江子（平成 25 年 4 月～平成 27 年 3 月）
	網谷・マリー・レイチェル（平成 26 年 7 月～）
教室事務	浅野万里子
	山本 千季
	石井 夢（平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月）

教育でお世話になった先生方（五十音順，敬称略）

岩中 督  
岡 明  
北原 良子  
木村 敬子  
小見山智恵子  
近藤 和子  
佐藤 博子  
杉山 正彦  
相馬 光代  
武村 雪絵  
塚野 和代  
土田 晋也  
長村 文孝  
堀 成美  
本田 京子  
松田美智代  
松本 和史  
山下 直秀

大学院生 博士

末次 美子  
藤岡 寛 (～平成 26 年 9 月)  
桐谷 麻美 (～平成 26 年 3 月)  
大塚 寛子 (～平成 27 年 3 月)  
森下 美紀 (～平成 27 年 3 月)  
瀬戸山有美  
副島 堯史  
目 麻里子  
菊地 良太  
水越 真依

修士

岡部 花枝 (～平成 26 年 3 月)  
目 麻里子 (～平成 26 年 3 月)  
菊地 良太 (～平成 26 年 3 月)  
水越 真依 (～平成 26 年 3 月)  
高梨 志帆 (～平成 27 年 3 月)  
松原 由季 (～平成 27 年 3 月)  
藤田 彩子 (～平成 27 年 3 月)  
江本 駿 (～平成 27 年 3 月)  
李 孝媛 (～平成 27 年 3 月)  
丸山 暁子 (～平成 27 年 3 月)  
今井 紗緒  
小石澤素子  
中嶋 祥平  
大城 怜  
鈴木 征吾  
中村真由美  
福井 千絵  
梅下かおり (平成 25～26 年度休学)  
吉備 智史 (平成 26 年度休学)  
卒論生 吉備 智史 (平成 25 年度)



客員研究員 内藤 直子

- 大嶺ふじ子 (～平成 26 年 3 月)  
渡邊 久美 (平成 15 年 4 月～)  
松本 和史 (平成 16 年 4 月～)  
栗原佳代子 (平成 20 年 4 月～)  
池田 智子 (平成 16 年 4 月～平成 26 年 3 月)  
樋口 明子 (平成 20 年 4 月～)  
上野 里絵 (平成 21 年 4 月～)  
津村 明美 (平成 21 年 4 月～)  
三條真紀子 (平成 21 年 10 月～)  
東樹 京子 (平成 22 年 4 月～)  
山本 弘江 (平成 22 年 9 月～)  
野中らいら (～平成 26 年 3 月)  
杉下 佳文 (平成 23 年 5 月～)  
村山 志保 (平成 23 年 11 月～)  
西垣 佳織 (平成 24 年 1 月～)  
小林 京子 (平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月)  
小町美由紀 (平成 24 年 4 月～)  
陳 俊霞 (平成 24 年 4 月～)  
當山 紀子 (平成 24 年 4 月～)  
三井 千佳 (平成 24 年 5 月～平成 26 年 3 月)  
大野 真実 (平成 24 年 4 月～)  
ブラブマン (田中) 一未 (平成 25 年 4 月～)  
松本 佳子 (平成 25 年 4 月～平成 27 年 3 月)  
藤岡 寛 (平成 26 年 4 月～)  
岡部 花枝 (平成 26 年 4 月～)  
伊藤美千代 (平成 26 年 4 月～)

研究生

- 石橋朝紀子 (平成 24 年 10 月～)  
今井 紗緒 (平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月)  
武者貴美子 (平成 26 年 4 月～)

家族看護学教室年報 第 11 号

発行年月 平成 27 年 3 月 31 日

発行責任者 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野  
東京大学医学部健康総合科学科家族看護学教室

Tel : 03 - 5841 - 3556 / Fax : 03 - 3818 - 2950

